

幻夢戦記

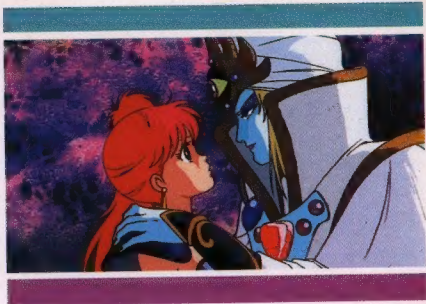


文 菊地秀行

絵 いのまたむつみ

Leda

X  
講談社文庫



秋の午後、朝霧陽子とその少年が  
道ですれちがった。

ヘッドホン・ステレオから流れる  
曲に勇気づけられ、少年に話しかけ  
ようとしたとたん……陽子は消えて  
しまった。

オリジナルビデオ作品の小説化。

# アシヤンティヘ

異次元空間へ落ちる  
陽子を待ちうけている  
のは……？





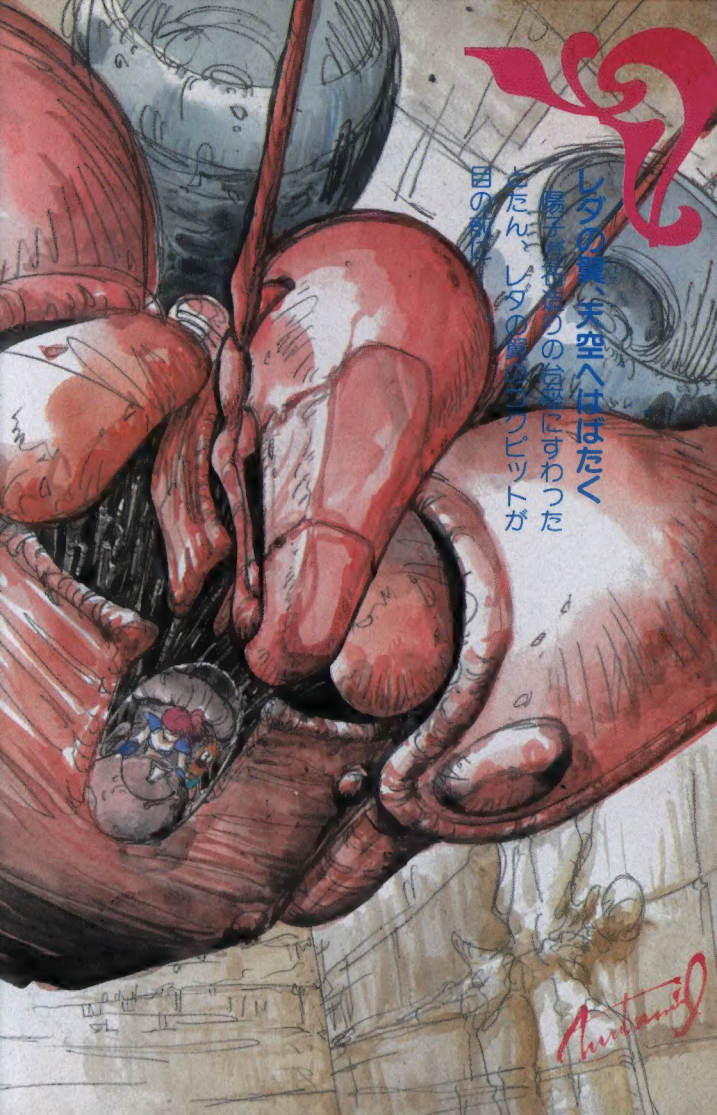


# レダの戦士へ誕生！

陽子がふしぎな鎧よろいを身に  
まとい、長剣を片手にある  
と、超能力を発揮しはじめ  
た。







レダの翼、天空へはばたく  
陽子と花子の台座にすわった  
とたん、レダの翼のさうピットが  
目の前には

Amamiya



講談社 X 文庫

ファンタスティック・アドベンチャー・アニメ  
幻夢戦記 レダ

文 菊地秀行

絵 いのまたむつみ



講談社

オリジナルビデオ作品 幻夢戦記 レダ

---

スタッフリスト

製作 東宝・カナメプロ

企画 藤原正道・カナメプロ

プロデューサー 長尾聡浩

原案 カナメ企画

脚本 武上純希・湯山邦彦

キャラクターデザイン いのまたむつみ

監督 湯山邦彦

作画監督 いのまたむつみ

メカニカルデザイン 豊増隆寛

美術監督 下川忠海

© 1985 東宝・カナメプロ



# 幻夢戦記\*レダ

## Fantastic Adventure of Yokko

### CONTENTS

#### —目次—

第1章	アシャンティへ……………	7
第2章	神学者リンガム……………	27
第3章	女戦士誕生……………	47
第4章	奇界アシャンティ……………	69
第5章	ヨニとの邂逅……………	109
第6章	巨人大決戦……………	127
第7章	魔獣壊滅……………	151
第8章	内なる死闘……………	175
対談	……………	199

# 登場人物紹介

主人公の女子

高生、十七歳。自

分の作ったピア

ノ曲によって、

別世界アシャン

ティへ行き、レ

ダの戦士となっ

てゼルと闘う。

レダ教徒唯一  
の生きのこり。

レダの神殿で陽

子と出会い、陽

子がレダの鎧よろいを

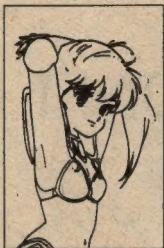
手に入れるきつ

かけを作った。

鉄巨人を操る。

*Nabea*

あさぎりようこ  
朝霧陽子



*Mami*

三三

*Ringham*

リングラム



*Zell*

ゼル

すべてを見、

すべてを知るた

めに旅をしてい

た老犬。陽子と

の出会いをきつ

かけに、ゼルを

倒すために行動

をともしする。

陽子の住むノ

アの世界を征服

しようと企たくらむ野

心家。レダのハ

ートを手に入れ

るため、陽子を

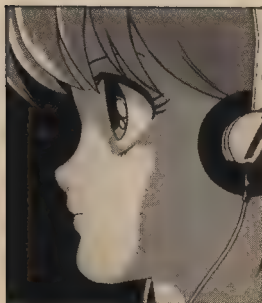
アシャンティに

引きこむ。

東宝+カナメプロ製作 オリジナルビデオ作品

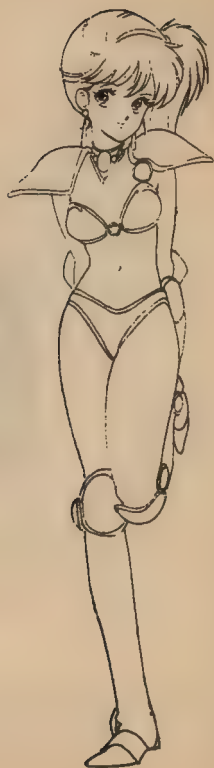
ファンタスティック・  
アドベンチャー・アニメ

# 幻夢戦記 レダ



菊<sup>きく</sup>  
地<sup>ち</sup>  
秀<sup>ひで</sup>  
行<sup>ゆき</sup>





●第1章 アシャンティへ

窓を閉めておいても、秋の陽光はガラスを感じさせずにしのび入り、床で碎けて部屋を白い光で埋めた。

陽子の顔の輪郭りんかくをなぞるように光の粒が動く。調べに押されているのだった。

自ら作ったその曲のかもしれないイメージよりも、それを贈るべき相手の顔を陽子は思いうかべた。

十七歳——高二のいままで何度も経験してきた懐かしい想い。

その中に、彼の顔がうかんでいた。

小さなカセット・プレーヤーにおさまった磁気テープの調べを聴いたとき、その顔はほころびるだろうか。



それがわたしの心だとわかってくれるだろうか。



「ばあ。」

いきなりドアが開いて、父と母が顔を出した。

「な、なによ、いきなり。ノックもしないで!」

陽子は怒りくるった。あわててスイッチを切る。はじめてのことではないが、今日は許せない。雰囲気めめちやくちやだ。

「出てってよ!」

といわれてひっこむような両親ではない。先を争うように室内に乱入してきた。

「なんじや、おまえ、ここ半月くらい、シケた顔しとると思つたら、こんな甘つたる曲つくつとつたのか?」

あきれたように父の言葉に、陽子は逆上した。

「ドアの外で立ち聞きしてたのね! ひどいわ。」

「なにいうの、お父さんに向かつて。」

父よりもつと興味本位な母親が、楽しそうにいさめた。

「みんな、おまえのたを思つてしたことじゃないの。」

「どこがよ!」

「まあ、いいわ。とにかく、男の子の気を引くのに音楽、それも、ピアノのセレナーデ小夜曲なんていまだ流行りません。パンク・ロックにしなさい。」

「そっちのほうがよくばど古いわよ！　だいたい、どうして男の子だなんて思うの？　不潔よ！」

「なにいうか、母さんに向かって！」

父親が叫んだ。こういうときは共同戦線を張ってくる。親というのは永遠に子供の敵だ。「しかし、パンクは確かに古いな。虎造はどうか、あれは永遠だぞ。」

「虎造って——浪花節ななげしじゃないの!!」

我慢できなくなって陽子は叫び返した。自分の親だから変わってるのは百も承知だが、子供の気持ちをどう考えているのだろう。

さすがに陽子の激昂げきようを知って、超陽気な両親も顔を見合わせた。

「ところで、そういう曲を好む男というのはどんなタイプだ？」

父がニヤニヤしながら聞いた。

「吹けばとぶよな青白いハンサムか？　浅黒いスポーツマンか？　ん？　ん？　ん？」

「一度、お家へ連れてらっしゃい。母さんがすみからすみまで調べてあげる。」

「いいかげんにして！」





陽子はどうとう、ヘッドホン・ステレオをふり上げた。

「だれが父さんと母さんに、ボーイフレンドなんか紹介するもんですか。見てらっしゃい、内緒で交際して、内緒でホテルいって、こっそり結婚して子供産んでやるから！」

「それはすごい！」

父が茫然と眼をみはり、

「シュールだわ！ アナーキーよ！」

と、母が興奮する。本気で感動していた。

陽子の眼の前を、いままで家に連れてきては、青ざめて帰っていったボーイフレンドたちの顔が過ぎる。いくらいまの若者に負けないモダンおじんにおばんといっても、こう変わっていては、普通の若者じゃ付き合いきれないだろう。

どちらも大好きな陽子ではあったが、ときどき、やっぱりまともじゃないなあという気分になるのはやむをえない。とくに今日はそうだ。

「出てってたら！」

陽子はもう一度叫んだ。

「人がせっかく心をこめてつくった曲なのに、からかったりして！ ほんとうにこれ、ぶつけるわよ！」

「わっ、わっ。」

と、父が陽子を指さしていった。

「やっぱり、いるんだ。ボーイフレンド。」

「うるさい！」

ごうつと頭に血がのぼる。赤鬼みたいな顔色になった陽子を見て、二人はそそくさと部屋を出ていった。

机の前にペタリと腰をおろし、陽子はちよっぴり暗い気持ちで考えた。

わたしも大きくなったら、ああいう親になるんだろうか。不思議と楽しかった。陽子の家には笑いが絶えないのも、あの両親とこの娘なればこそだ。

だめ、と陽子はあわてて自分にいいきかせた。わたしは十七歳。陽気になる前に、シリアス路線でいくべきだわ。

そうよ、心にしみる、せつない恋をするのが掟よ。<sup>おきて</sup>

停まったままのヘッドホン・ステレオを、陽子はもう一度生き返らせた。

シヨパンやシューベルトにはおよばないけれど、こめた想いの熱さではどんな楽聖にもひけをとらないはずだ。

冷たい機械の肌にそつと頬<sup>ほお</sup>ずりしたとき、陽子は自分が涙を流しているのに気がついた。

にやりと笑ってしまう。

そうよ、これが恋というものよ。

翌日の放課後。

陽子はれんがづくりの歩道に立っていた。

「出会いの道」という。半年まえ、陽子がひとりでつけた名前だった。

少女の感傷的な命名にふさわしい道である。片側はだれのものとも知れぬ古風な洋館の壁が、つきることを知らぬようにつづき、館の屋根にとまった風見鶏かざみどりの影が淡く地上におちている。

車道に面した道の端はしに並ぶプラタナスは落葉し、道を歩く人々の足の下に、かすかなつぶやきをのこして消えていく。

陽子はその木の本もとに近づいた。

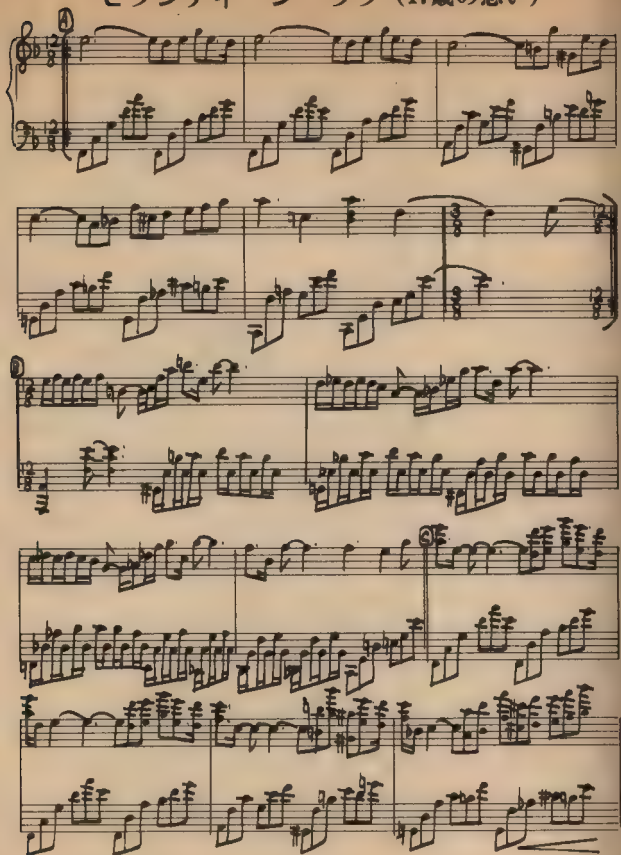
幹の真ん中にそっと眼めをおとす。

小さなハートが刻まれている。

そのふくらみの片方に、つつましく、恥ずかしげに――、

Y O H K O

# セブンティーン・ラブ (17歳の想い)



鷺巣詩郎／作曲

日本音楽著作権協会(出)許諾第8550607-501号

陽子が記したものではない。

いつか、だれかが——陽子と同じ名前の女の子が、そっと刻んだものか。

そして、ハートの片側に、もうひとつの名前はなかった。

——わたしは、刻みこめるだろうか。

陽子はふと思った。

ううん、刻んでみせる。だって、恋をしているんだもの。

陽子は、ファイトがわくのを感じた。

ふと、歩道の向こうに、小さな影が見えた。

胸が高鳴りはじめる。

イヤホンを耳に入れ、腰のベルトにとりつけたヘッドホン・ステレオのスイッチをオンにする。

三か月のあいだ、心をこめてつくった旋律が耳をみたす。

心をこめて。

それしか誇るものはなかった。

勇気を出しなさい、陽子。——陽子は自分にいいきかせた。

人影はやがて、ひとりの少年の姿に変わった。白いシャツに黒いスラックス。平凡な学



生かばんを手にしたどこにでもいるような高校生。

それだけだ。

ただ、陽子には光ってみえる。そこが違ふのだった。

陽子は歩きだした。

ひと言いえばすむ。それに相手がどう応対しようと、陽子とは別の問題だ。

——でも、なんていえばいいの。

不安の風に吹き乱れる心をつなぎとめようと、陽子はヘッドホン・ステレオのボリュームを上げた。

近づいていく。

近づいてくる。

なにをいえばいいのか。

少年の顔がはつきりと見えた。

ひとつの言葉が、陽子の胸にうかんだ。

これだわ。

少年は飄々とした足取りで、いま、陽子のわきを通りすぎる。

陽子はいった。そのひと言を。

胸の裡で。

二つの影は、なにもなかったようにすれちがい、白い秋の光の中を遠ざかっていく。

——やっぱり、だめだった。

哀<sup>かな</sup>しみが陽子を包んだ。

そのときである。

地面が不意に波立った。電波障害を起こしたTV画像のように。

きらめく白光が陽子を包んだ。

祝福するかのように。

なにか感じでもしたのか、数メートル先で少年がふりむいたとき、れんがの道はあいかわらず落ち葉に埋めつくされ、吹きぬける風に哀しげな音をたてて舞うそれらを、やわらかい秋の陽射<sup>ひざ</sup>しだけが見つめていた。

陽子は虚無そのものに吸いこまれていった。闇も光も音もなく、落下感さえも、あらゆる方向に対して感じられる。ひとりきりの自分が、四方八方へ落ちていくようだ。

——な、な、なによ、いったい、どうなっているの!?

叫んだが、声にはならなかった。

——「彼」が助けにきてくれないかしら。

そんなことあるはずがない。

——父さんと母さんは？

いまごろは二人でバイクに乗り、暴走族もびっくりのスピードで東名をとばしているころだ。作家とその妻なんて、みな、あんなふうなのだろうか。

なんの前ぶれもなく、視界に男の顔が広がった。

味方ではないのはすぐにわかった。

高校の教科書で見たギリシア彫刻みたいに彫りの深いハンサムな顔に、かぎりなく邪悪な瞳がのっている。

「よく来たな。」

と、そいつはいった。声は美しく、響きは邪悪だった。

「待っていた。さ、レダのハートをわたせ。」

——なにさ、いきなり。

陽子は憤慨した。女の子が困ってるのに助けるどころか、わけのわからんものをよこせとくる。新手の迫いはぎだろうか。母も、男は顔じゃないわといっていた。父さんくらいがちょうどいいのよ。

そのへんの真偽はともかく、眼の前のハンサムが、陽子によからぬ意図を抱いているのは明らかだった。

ぐい、と右手を広げて迫ってくる。

——やだ、やめて。あたし、じつは心臓がないのよ。

「さ、わたすのだ、レダのハートを。」

巨大な手のひらの向こうから声ができこえ、指がぎゅっと締められた。握りこぶしの間から、目もくらむ光がほとばしった。

男の顔に動揺が走った。

あわてて開いた手の中に、陽子はいなかった。

「こんな、アホな——いや、ばかな！」

彼は茫然ぼうぜんとつぶやいた。

「どうなさいました、ゼルさま!？」

別の声が背後でわいた。

男——ゼルはふりかえらず、

「逃げおった。たしかに捕らえたと思ったのに……。」

「すると、あの娘はノアの世界へもどって……。」

「そんなはずはない！」

ゼルは怒号した。美貌が鬼のそれと変わり、叱咤する。

「追え！ レダのハートは確実にこちらの世界へ引きずりこんだ。かならず手に入れるのだ！」

「はっ！」

背後の声の主は平伏したようであった。

アシャンティは平凡な世界であった。

たとえば、小さな森の中に、この世界の縮図を見ることができる。

柔らかい緑の草が一面にしげり、風もないのに揺れては歌らしきものを歌う。内容は入り口から出口までのルートだ。機嫌のいいときは、美しい声で細かく、正確に教えてくれるが、風とけんかをしたり、草どうしがいがみ合ったりすると、不気味な声でたらめをほえるから、旅人は注意がかんじんだ。まかりまちがって、ライアの店にでも迷いこんだ日には、さしてうまくもない「死神ブドウ」のワイン一杯で、市価の百倍近い勘定書きをつきつけられたりする。文句をいえば、店の奥からでてくるのは、身長五ダインもある「火食い魔」の用心棒だ。こいつが腹の中にある生体核炉から溶けたウラニウム塊をとりだして凄みをきかせたら、悪いことはいわない、黙って金を払うことだ。なにしろ、自分



や店が灼けるくらい屁でもないと思つてゐる相手だから、始末の悪いことこのうえもない。森の主は便宜上、古木の精たちである。

ところが、ご存じのとおり、古木などというのは森に何千本とあり、しかも、そろつて仲が悪いときてゐるため、自分かつてにその位置を変えてしまふのだ。

だから、森の奥ではいつも、根っこが地面を歩くザクザクという音がする。

と、まあ、詳しく書けばキリのない、きわめて平凡で退屈な世界へ、ある日、おかしな侵入者が現れたのであつた。

陽子は草むらに倒れてゐた。

あれから、どれほどの時間がたったのかわからない。

こんこんと眠る姿は、身体に別状のないことを示してゐた。

風が頬をなでた。アシャンティの風には温度はないが、においがついている。

皮膚感覚よりも胃のほうを刺激されて、陽子は目ざめた。

「あーあ。」と伸びをする。おなかがかと鳴った。

「よく眠れたわ。おなかもすいたし、今日の朝飯は——。」

眠い眼をこすりこすりぶつぶついていたのが、急に押し黙り、ゆっくりと周囲の光景

に眼をこらしはじめた。自分の身に起こった出来事と、森の異常現象にようやく気づいたのである。

そびえる木は異常に高いし、降りそそぐ陽光がその葉にあたると微妙に色を変え、しかも、美しい音さえひびかせているではないか。

陽子の顔は虹色にかがやいた。

「なんてこと——わたし、異次元の世界へ来ちゃったのかしら。」

このへんは現代っ子らしくのみこみが早い。純文学作家の父親がこむずかしい本ばかり強制するのに反抗し、明るく楽しいSFを優先的に読みあさっているのである。

「惜しいなあ、カメラ持ってくればよかった。ピーちゃんや由香に、証拠写真持って帰れるのに——。」

ここで、ようやく事態に気づいた。

「やだ。どうやって帰るのよ!？」

陽子は首をひねった。

その頭上を黄色い蝶ちようがとぶ。ただし、大きさははねのさしわたし二メートル。木もれ日にあたると、眼もくらむばかりの光を発し、ゆうゆうと飛び去った。どうやら光を飛行エネルギーに変換しているようだ。

陽子は立ち上がった。

この世界からの脱出計画はつぎのようにまとまっていた。

まず、意思の通じる相手を探す。言葉もテレパシーも通じない場合は、しんせつで気の弱そうな相手を見つけ、強引にその家へ押しかけて言葉を習得するまで置いてもらうこと。家事労働をこなしたり、自分の世界のことを話して珍しがられるのもいいが、その場合、ある程度の報酬——この世界の常識レートの六割——は要求する。

最悪の場合は、自分を探しているらしいあのハンサムを見つけて事情の説明を受け、しかる後にいっぱい食わせてトンズラをかくこと。この段階に達するためには、多少の色仕掛け——太ももをちよっぴり見せたり、そっと相手の肩にもたれかかったり——もやむをえないが、けっして相手を過度に刺激しないこと。本気にさせてしまったら、適当にあしらひ、危ない場面には極力直面しないよう心がける。

なんとなく、池袋のバーでバイトしてる友だちのいつてた、客あしらいの心得に似てるなと思ひながら、陽子はあてもなく道を歩いた。

歩けば歩くほど、奇っ怪な森だということがわかってきた。

風には木村屋のアンパンや、キャフェ・ラ・ターブルのフレーズ、HANADA SWEETのクッキー、柳屋やなぎの鯛焼きを思わせる香りが漂っているし、樹木ときたら、一本の枝で別

の枝を折り、それを別の場所にさして、どうやらおしゃれに励んでいるらしい。

三十分以上歩いても、意思の疎通がはかれるような生物には出会わなかった。

「おかしいなあ。ひとりぐらい、知的生命体がいてもいいのに。」

陽子はべそをかいた。

人を食う知的生命体というのが出てくる可能性もあるわけだが、根が楽天的だし、明るく楽しいSFばかりを読んでいるので、その辺は気にならないのである。

「あ、なにかある——お店だわ！」

陽子の顔がぱっと明るくなった。

緑のしげみの奥に見えるのはまちががなく、童話かなにかのイラストによくでてくる、森の喫茶店だったのである。

大急ぎで走り寄り、内側<sup>なか</sup>をうかがうと、カウンターらしき台の向こうで、カンガルーによく似た生物が、木のカップらしきものをふいていた。

「えーい、当たって碎けろよ。」

陽子はスイング・ドアらしき木の板を押した。

開かない。引いても同じだ。下をくぐろうとすると、気づいたららしいカンガルーがなにやらわけのわからない叫びを発し、窓のほうを指さす。どうやら、そこから入れといって

いるらしい。

「なんだ、入り口は飾りか。だから異次元の世界っていやなのよ。ふん、だ。」

ぶつぶついいながら窓のところへいき、ガラスだかなんだかわからん半透明な物質をはめこんだ木のわくを持ち上げた。あっさり動いた。

そのとたん、

「あら。」

ほぼ長方形の木づくりの店は、なんと真ん中から真つぶたつに、——いや正確には外側の壁だけが真ん中から割れ、左右に移動したのである。茫然とした陽子が、それでもトコと内側へ入ると、家はすぐつながった。工事の手間や、客がくるたびに動かす燃料費を考えたら、およそ採算に合わないアイディアだ。どこかの常識無しが考えたに違いない。

「お客さん、なんにします？」

おかしなのが来たなと思いつつ、バーテンのライアは愛想のいい声を出した。

そう、ここは、なんと、あの恐るべき暴力ぶったくりカフェ——「ライアの店」だったのである。危うし陽子！



## ●第2章 神学者リングム

「お客さん？」

ポケツとしてる客に、ライアはもう一度呼びかけた。

「あ、あの、ここはどんな世界なんでしょう？」

陽子は思いきって聞いてみた。しんせつそうなマスターと思ったのである。

「おい、姉ちゃん、どっから来たのか知らねえが、おかしな言葉しゃべるんじやねえよ。」  
ライアはすみだした。意味不明の言葉をつかう客が、自分をからかっていると思ったのだ。

陽子はよろこんだ。相手の言葉はさっぱり不明だが、積極的に話しかけてきてくれた。なんて、いい人なんだろう。うまくいけば、自分の境遇に同情し、しばらく置いてくれるかもしれない。

「あの、あたし、別の世界から来たんです。それで、帰る方法がわかるまで、いろいろ教えてくれる人を探してるんです。——あつと、おなかすいちゃった。なにかごちそうしてくれませんか？」

「けっ、とぼけやがって。近ごろの旅人たびにんは始末はわりが悪いや。」

と、ライアはひとりごちた。それから、あることを思いついた。

「待てよ、どう見てもチンケな格好をしてやがる。こりや、森の外から来た、新型の動物

かもしれん。となると、飼い主がいるはずだ。おもしろえ、一杯飲ませて、うんとこき吹っかけ、私えないなんてぬかしたら、ひっ捕まえて身代金を要求してやる。」

陽子は驚いた。言葉が通じないと思っていた相手が後ろを向き、すぐにふりかえると、キラキラ光るブドウ色の液体を満たした大きな玉子形グラスを、カウンターに置いたのである。

おずおずと近寄った。上目づかいにカンガルーを見て、

「あの……これ、ごちそうしてくれるんですか？」

「いいから飲みなつて。」

ここにおいて、利害と会話内容はみごとに一致したのである。

「うわあ、おいしい！」

ひと口飲んで陽子は歓声をあげた。甘くてちよっぴりすっぱい、なんともいいようないすてきな味だ。原宿や青山にだって、こんなジュースを飲ませてくれる店はない。

見知らぬ客が、ガバガバと「死神ブドウ」ワインを飲み干したのを見て、ライアは眼をむいた。口当たりはいいが、<sup>酔</sup>酩酊度がきわめて高く、よほどののんべえでもちびりちびりやるのが普通だ。

こいつあ、新種の怪物じゃねえか？

不吉な考えがライアの邪惡な腦を横切った。

「さ、飲んだらすぐ払うのが森の掟おきてだぜ。」

ポンとカウンターに勘定書レシートきを置いた。

「まあ、リンゴだわ！——なんてしんせつなカンガルーさん。」

陽子は素早くそれをひっさらい、ガブリとかんだ。うむ、これもいけるわ。

「な、な、なにしやる！」

ライアはとびあがった。金額はペトレの実ひとつ——五千ダインで計算する。しかし、まさか、それを食っちゃもうやつがいるとは。いや、こいつは、おれにけんかをふっかけているんだ。

「おい、出てこい！」

店の奥に向かって叫ぶ。

「おう。」

とドスの効いた声が答え、用心棒が姿を現した。

「きやつ、かわいい、ワンちゃん！」

今度こそ、ライアは青くなった。いつもの「火食い魔」がかぜをひいて核炉の出力が鈍ったため実家へもどり、アルバイト急募の広告をみてやってきた宿無しを雇ったのだが、



やはり、うまくいかない。このお客、ちつとも怖がらないではないか。

黒いサングラスに黒ス<sup>ブラック</sup>ーツ、頬<sup>ほ</sup>に傷のある老犬も、陽子の反応にはガックリきたらしい。それでも気を取り直し、

「おお、姉ちゃん、この店でおかしなまねしたら、承知しねえぜ。」  
ときたものだ。

陽子のほうはもとから動物ずきで、しかも言葉がわからない。犬がサングラスをかけているのも背広着てるのも、SFの世界ならあたりまえだと思ふから、まさか脅されてるとは考えおよばず、いきなり抱きついて、毛むくじやらのほっぺたへちゅつとキスしてしまった。

陽気な行為の原因は、もうひとつ。——  
死<sup>ヤ</sup>神<sup>ック</sup>ブド<sup>ロ</sup>ウ<sup>ク</sup> ワインが、ようやく効力を発揮  
したのである。

「野郎、ふざけやがって！」

勘忍袋の緒が切れたライアが大刃のナイフをふりかざし、陽子にとびかかろうとしたとき、ぐおん、と音がして、店は真つぶたつに割れた。

新しい客だ。

それを見て、ライアは硬直した。



「あつ、ゼルの護衛兵！」

低い叫びは、年老いた用心棒の口からもれた。

新しい客は、栗の実を思わせるボディーに二本の足と触手をつけた、合金製のロボットだったのである。ぜんぶで十台いる。

ジーッ、と音をたてて、電子アイを備えた頭部が回転し、ライアから陽子を向いた。

「いたぞ！」

という。

「いたわ！」

陽子も絶叫した。ロボットたちの言語は、なんと日本語だったのである。満面をよろこびの色に染めて駆け寄ろうとしたとき、

後ろからグイとえり首を引かれた。

「な、なによ!？」

「行っではいかん。やつらは——。」

老犬がそこまでいったとたん、ロボットたちがいっせいにこちらを向いた。

「ほう、これは、リンガム老師ではございませんか。」

親玉らしい一台がばかていねいな口調でいう。これは犬に合わせたアシャンティの言語

「なにをいう、人違いじゃ。」

老犬はあわててサングラスを掛け直した。陽子はきよとんとしている。

「ま、よろしいでしょう。疑わしきは罰するのが我々のやり方。あなたが老師であろうとなかろうと、いったん疑惑を抱いたからには――。」

いきなり、そいつの触手が回転した。柔軟な鞭むちとみせて、錐きりのように旋回しつつ、老犬を襲ったのである。

「危ない！」

陽子が両手を広げて錐を防ごうとした。なにしろ酔っぱらってるから怖いものはないのである。

しかし、鋭い先端は陽子の手のひらに食いこむ手前でピタリと停止してのけた。さすがは電子メカ。ひと味ちがう口あたりだ。

「年寄り相手に、なにしゆるのよう――ヒック。」

陽子がからんだ。ロボットにからむ女子高生というのも珍しいが、何度もうとおり酔っぱらっている。世の中、先に酔ったほうが勝ちなのである。

「おい、ちよっと待ちな。」

いつのまにかカウンターの背後にまわったライアが凄<sup>すこ</sup>みをきかせた。ロボットたちがふりかえる。

「おれの店で騒動はたくさんだ。外へ出てやりな。そのまえに迷惑料、ひとり三千ダイン払ってもらおうじゃないか。」

ロボットから金をとろうという根性はりっぱなものだが、相手が悪かった。

一台が問答無用で触手を放ったのだ。

それはうなりをたてて分厚いカウンターをぶちぬき、ライアの腹を背後の壁へ縫いつけてしまった。ぴゅつと鮮血がほとばしる。

つぎの瞬間、すさまじい白光がロボットたちを襲った。腹を貫かれたライアが、そのせつな、カウンター越しに構えていた白熱砲の引き金を引いたのだ。

一〇〇万度の超高熱球がロボットたちの間で爆発し、計三台の超合金ボディをあつというまに蒸発させてしまった。

「いまじゃ、逃げろ！」

老犬——リングムが陽子のえりを食わえて走りだす。ものすごい力だった。ぴゅうと触手が空を切ったが、二人はたちまち裏口から店の外へ脱出に成功した。

「ねえ、あなたあ。」

書齋に入ると、陽子の母は、一心不乱に机へ向かう夫に向かって、心配そうな声をあげた。

「なんだ、どうした？ 陽子が消えたか？」

「どうしてわかるの!？」

「冗談だよ。——ほんとうに消えたのか？」

陽子の父はようやくふりむいた。机の上には、書きかけの原稿が積んである。

「いえね。いつもは部屋でピアノたたいところなのに、かばんだけ置いて、当人はいないですよ。誘拐ゆうかいでもされたんじゃないかしら？」

「ばかもの。ピアノたたいてるのをやめたんなら、曲ができた証拠じゃないか。好きな相手に聴かせにいったに決まっとる。意欲まんまんて新作にとりかかっていると、つまらん世話を焼かせるな。」

「ふん、だ。」

「いやあ、危ないめにあつたな。」

リングラムが前足で額の汗ひたいをふきながらいった。

ライアの店を遠く離れた森の中である。当分はロボットたちにも見つかるまい。

陽子は真っ赤な顔して草の上にあぐらをかいている。酔いはいっこうに醒めないようだ。「しかし、おぬしのおかげで助かった。いや、若いに似合わず勇気があるの。リングム、礼をいうぞ。」

「どういたしましてえ——ヒック。」

「しかし、おぬし、変わった服装をしておるの。いったいどこから来た？」

「どこから？ あっちょよ、あっちょ。」

陽子は頭の上に広がる大空を指した。そこで気づいた。

「ど——どうして……犬が、日本語を、しゃべるのよう！」

「ほう、これは日本語というのか？ わしはまた、ノア語と思っておったがの。先刻、あの店で、おぬしがロボットどもに啖呵たんかをきったのを耳にしたときは驚いたぞい。」

「どうして、しゃべれんのよう!？」

リングムは苦笑した。

「わしはこれでも、神学者のはしくれでな。ほかに言語学、物理学、錬金術、歴史学、伝承学の学位をもっておる。ノアの言語は、伝承学の一環として学んだのじゃよ。」

「へえ。——どんな伝承よ。それにノアってなにさ？ ふん、矢でも鉄砲でも持ってらっ

「しゃいな。」

「そのまえに、二、三聞きたいことがある。」

リングラムが不意に真顔になっていった。

「こつちもあるわよ。そんなえらい先生が、なんで喫茶店なんかにも働いてたの？」

老犬はバツが悪そうに頭をかいた。消え入りそうな声で、

「じつは、わし、真理の探究を目的に旅をしとるのじやが、前の村で所持金のすべてを盗まれての。それで、アルバイトに——。」

さすがに用心棒とはいいそびれた。

「えらい！ 気に入った。いい年して子供みたいにえらい！——わたし、陽子。よろしくね。女子高生よ。」

「ジョシコオセエ？——おかしな名前じやの？ で、どこから来た。空の上からか？」

「ヒック——わかんないのよ——ヒック。」

陽子は問われるまま、これまでの出来事を話した。リングラムは黙って聞いていたが、話しおえると、みように光る眼でうなずいた。しよぼくれた老犬のイメージは、知性に満ちあふれた老科学者のそれに一変していた。

「よいか、おぬしは封印された世界、ノアからここへやってきたのじや。この世界はア



シャンティ。ノアとは昔、次元の道を通じて自由に行き来できたのじゃが。」

「はン？」

「酔いつぶれているところを悪いが、ちよつといっしょに来てもらおう。」

リングムは陽子を連れて森を横切り、急な丘おかを登りはじめた。

すこしして、崖つぷちに出た。恐ろしく高い——二千メートルはありそうだ。

下をのぞきこんだ陽子に、

「そっちではない。あっちじゃ。」

リングムの指すほうを見て、陽子は眼めを丸くした。

はるか上空に、ぼんやりと蜃気楼しんきろうのような球体がうかんでいる。そして、逆さまに映る

都市らしいものの正体は——。

「東京だわ。わたしの故郷！」

不意に熱いものがこみあげ、陽子は絶句した。帰りたい。痛切に思った。

「やはり、そうか。ノアの蜃気楼がうかぶとき、ここの間に次元の道が開くと言ひ伝えられておる。おぬしは、なんらかの方法か力によって、こちら側へやってきたのじゃ。」

「なんらかつて!!」

リングムはすこし考え、陽子の腰を指さした。

「これ？——ただのウオークマンよ。」

「う、お、お、く、ま——う、お、く、ま？——なんでもいい、ちょっとそれを鳴らしてみろ。」

「どうするのよ、こんなもの？——だいいち、外へは聞こえないのよ。」

「いいから。話をきくと、どうやら、そこに入った『音楽』とかいうやつが、秘密の鍵を握っておる。」

いわれるまま、陽子はイヤホンを耳にさした。

あのれんがの並木道。ふりそそぐ秋の光、歩道の落ち葉——そして、あの少年。帰りたい。帰ってひとめあなたに会いたい。

ふっと周囲の光景が変わった。

陽子の全身は光の粒に覆われた。

浮揚感——そして、両足の底が固いものに触れる。

まさか——。

陽子はおそろおそろ眼を開けた。

飛びこんできた光景は森のそれではなかった。

すり減ったれんがの歩道。プラタナスの並木、かざみどり風見鶏の影……。

「帰って来たんだわ！」

陽子はある並木道の上に立っていた。

「やった、やった、やった。」

跳びあがってかけたそうとしたとき、

「おーい、わしをなんとかしてくれんか。」

足元でリングムの声がきこえた。

「あら、いっしょに——。」

来たの、といいかけて足元を見たたん、陽子は悲鳴をあげた。

そこに浮いているのは、リングムの頭だけだったのである。

思わずよろけたはずみに、体勢を立て直そうとした右手が耳のイヤホンに触れてはずれてしまった。

急速な落下感が陽子をとらえる。

「きやつ、やだ。またあああ——。」

二人——いや、ひとりと一匹は、アシャンティの森の中にいた。

「もう——」

と、陽子はこぶしをふりあげてリングムをなぐった。

「いてて、なにをする。」

「なにをじやないでしよ、なにをじや!! せっかくもどれたのに、あなたがへんな顔出すから……あーん、お家に帰りたいよう。」

草の上に腰をおろし、わんわん泣き出した陽子をみて、リンガムは頭をかいだ。

「図体はでかいが、中身はまるで子供じやな。ま、それもかわいげがあつてよいか。——ほれ泣くのはやめて、さっきの機械、なんといったか——。」

「ぐすん——ウオークマン? ——ぐすん。」

「そ、それじや。それをもう一度動かしてみい。」

「どうしてよ?」

陽子は涙をふきながら聞いた。

「おぬしの話だと、アシャンティへ来たときもそれがかかつておつた。ノアへもどつたのも、それを聴いているときじや。ひよつとすると、その機械が、次元の道になんらかのつながりをもっているのかもしれない。」

「あら、名推理!」

陽子は手をたたいた。泣くのも忘れてゐる。気分転換の早さには自信があつた。

「じゃ、早速——。」

ヘッドホン・ステレオに手をのばす。

ビュッ！ と空気が鳴った。

「きやあ！」

とめる暇もなく、陽子の腰からヘッドホン・ステレオは奪い取られていた。繁<sup>しげ</sup>みがゆれ、ゼルの護衛兵——あのロボットたちが顔を出した。

一台の触手にヘッドホン・ステレオがひっかかっている。

「これが「レダのハート」か。」

そいつはつぶやいた。

「なにイ！」

リンガムの眼<sup>め</sup>がらんと輝いた。

「ふふ……これさえ貰えばおまえたちに用はない。生かしておいても小うるさい虫ケラ。ここで片づけてくれる。」

いきなり、丸い肩からQUICK——ばかでかい鎌<sup>かまじよう</sup>状の刃が出現した。

「ちょ、ちょっと待ってよ。どうしてここをかぎつけたの？」

「ははは、うまく逃げられたつもりか。おまえの身体<sup>からだ</sup>からは死<sup>ヤク</sup>神<sup>ク</sup>ブドゥ<sup>ッ</sup>。ワインの香りがしみでておる。これは、この森の風には出せぬ匂<sup>きゆう</sup>いだな。嗅<sup>か</sup>覚<sup>かく</sup>センサーで追うのはいともたやすかった。」

「ほんとうにかぎつけたのね！」

陽子はへんなところで感心した。

「アホ、逃げんかい!？」

リングラムが叫ぶと同時に、びゅっ！と白光が空気を灼いた。すさまじい鎌の一撃を間一髪でかわし、陽子は走り出した。

ロボットたちも追ってくる。幸い、動きは鈍いようだ。

「こっちじゃ！」

リングラムがまるで道を知っているかのように導く。

「えい、めんどくさい。」

「ぎゃっ！——なにをする!？」

リングラムは悲鳴をあげた。陽子はその背にとび乗ったのである。

「このほうが合理的よ、急いで！」

「なんという、ちゃっかりやだ！」

うなったものの、老犬とはいえたくましいリングラム。ぐんぐんとロボットたちをひきはなしていく。

「すごいわ。——ちゃんと道も知ってるのね!？」



「いや、ぜんぜん。」

「え。じゃ、あてずっぽ!?」

「さよう。ふむ、このへんで聞かねばならんな。」

リングムはスピードをおとし、地をはうようにささやいた。

「草よ、草よ、教えておくれ。森の出口はどっちじゃ?」

「あっ!」

陽子が驚きの声をあげたのも当然であった。

草がいつせいになびいたかと思うと、左右に開き、一本の道をつくりだしたのだ。森の奥まで伸びている。

「行くぞ!」

リングムは走りだした。

二十分も走ったろうか。

いきなり前方に、毒々しい巨大な花の群れが出現したのである。

しかも、そのまわりには、ロボットたちがいるではないか!?

「しまったあ!」

と、リングムが宙をあおいだ。

「あの草ども風とけんかしおったな。それで気嫌をそこね、でたらめの道をつくったのじゃ！」

「でたらめどころじゃないわよ。ちゃんと、敵が待つてるじゃないの!!」

陽子も憤慨したが、背後の道はとうになくなっている。

「ははは——よいところで出会ったな。もう、逃がさん！」

いうなり、ロボットの触手が陽子を襲った。

リングガムの背に乗っていたため、逃げるのが遅れた。

あつというまに陽子は空中に巻きあげられていた。

「やめんか！」

叫んだリングガムも全身がんじがらめだ。

「ははは、どうしてくれよう。——そうれ。」

ロボットは陽子を空中でふりまわし、ぽんとほうり投げた。

人の匂いをかぎつけたか、さっきから花びらを不気味に開閉している、ひとときわ汚<sup>けが</sup>らわしい赤い植物の中へ。

「ジョ、ジョシコオセエ!?」

リングガムの悲鳴は、それが食肉植物と知っているためであった。

### ●第3章 女戦士誕生

「やーん、出してよう！ 出せ、出せ、出せ！」

陽子は夢中で花びらをたたいたが、こぶしはまるでゴムのよう<sup>はじ</sup>に弾きかえられてしまう。つぎの瞬間、花びらの内側から、白っぽい煙のようなものが湧<sup>わ</sup>きだしはじめた。じゅうつと音をたてて服が溶けていく。煙は強力な酸だったのである。

陽子は悲鳴をあげた。

リングラムもそれを聞いた。

かけようとしたが、彼の身体はロボットの触手にからめとられ、身動きひとつできない。

「ふふふ。」

ロボットはいやらしく笑うや、鎌<sup>かま</sup>の刃をリングラムの尾に近づけてきた。

「わーっ、やめろ！ しっぽは犬の誇りなんじゃ！」

リングラムの悲鳴が効いたものか、刃はぴたりととまった。

「ほうれ、見ろ。話せばわかる。」

ほっと胸をなでおろしたリングラムは、ロボットたちがいっせいに花の方向を向いているのに気づいた。

「こ、これは——花が燃えておる!?」

どのような化学変化が花の奥で生じたのか、花びらはみるみる毒々しい色彩を失い、白い光にのみこまれた。

森はかがやきに包まれた。

「こ、これは——強力なレダ・パワー！」

ロボットの一台が体内のエネルギー計測器を調べ、愕然と叫んだ刹那——。

光圧に耐えかねたものか、花びらは大きく左右に開き、その光の中心に、陽子は飄然と立っていた。

酸のために衣服はすべて溶かされて、光芒にシルエットのみ浮かぶ肢体は、生まれたときの姿そのものだ。

だが、リングムをはじめ、ロボットたちまで息をのんだのは、つぎの瞬間、その身体に生じた変化であった。

水底から立ちのぼる水泡のごとき光の粒が、ずっと陽子の身体のあちこちに凝集した。首に、胸に、腰に、手に、足に——。

邪悪な電子アイと、歓喜に彩られた老犬の瞳の前で、光は鋼の光沢を帯び、鎧の形をつかった。

陽子の腰に光の長剣が生みだされる様を、リングムは茫然と見守った。彼はある伝説を

知っていたのである。

女神と戦士の物語を。

変化は陽子の内部にも起こっていた。

もともと強い心がさらに強化され、全身に力がみなぎる。DNAに光の遺伝子が組みこまれ、活動を開始したかのようにであった。運動神経はとぎすまされ、筋肉の強度がぐんぐんレベルアップされる。原子段階アトム・レベルのチェンジリングだ。

悪への怒りが双眸そうぼうを炎と変えた。

陽子は一気に花からとび降りた。

「殺れ！」

ロボットたちが襲いかかった。錐きりのように触手が伸び、鎌かまの刃が走る。たがいによつからぬよう角度とスピードを計算し、そのくせ、すべてが目にもとまらぬ速さだった。

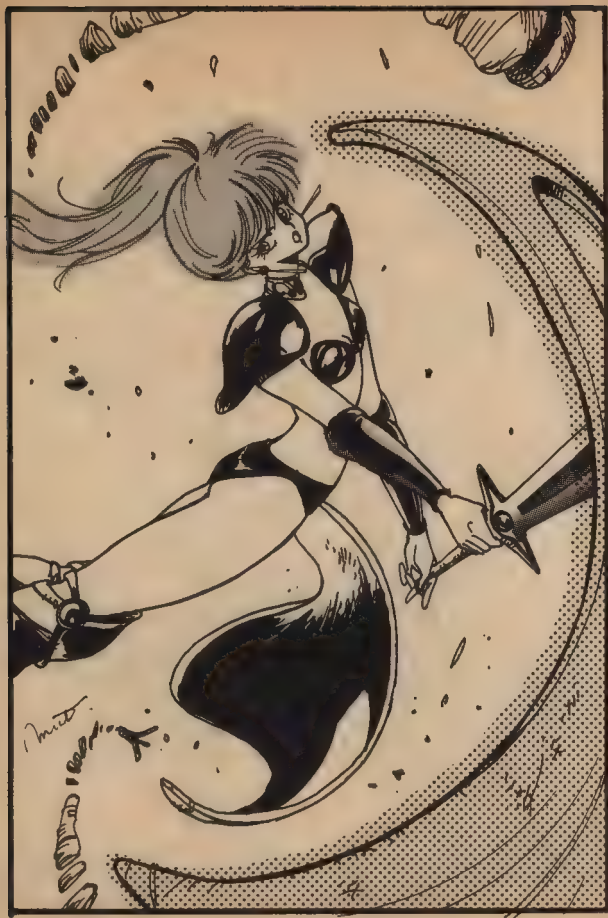
攻撃はそろって陽子の全身を貫いた。

ふらと、その姿が消える。

「!?」

あつけにとられるロボットの頭部が、つぎの瞬間、ふたつに裂けた。宙を跳んで背後にまわった陽子の手刀を食ったのである。





彼らが倒したのは、猛スピードで宙に舞った陽子の残像だったのだ。

「おのれ！ 小娘！」

ざっとロボットが周囲をとりかこむ。

「いよいよ、やる気ね。いくわよ。」

陽子もいいはなち、腰の剣に手をかける。

手のひらから流れるエネルギーが剣の組織に触れたせつな、すさまじい光芒こうぼうがふくれあがった。

地上のあらゆる光が、その一剣に集中したかのようにであった。

すらりとぬきはなった刃の光芒に、ロボットたちはたじたと後ろへ下がった。

ふっと頭上へ眼をやったとき、ざっとロボットが跳躍した。

頭上からなぎおとされる触手。

だが、陽子には敵の恐るべきスピードが、すべて高速度撮影のようなスローモーさで知覚できた。

眼前十センチにまで迫った触手を軽々とかわし、敵の胴を横にないだときも、触手は陽子のいた位置に届かなかった。

丸まっちい胴が光をはなつて両断される。

陽子は一気にアタックをかけた。

鎌も鎧も平然とかわして、つづけざまにロボットを切り倒す。

「さ、ヘッドホン・ステレオを返して！」

首領格のロボットに迫った。

「うむむ。」

と、まるで人間みたいに冷や汗を垂らして後ずさりするのを、さらに追いかけようとしたとき――。

猛烈な震動が大地をゆるがした。

森の一角から、茶色の大群が突進してくる。それを、巨木の大群と見ぬくより早く、陽

子は跳躍していた。

木の行く手にはリングムがいたのだ。

もちろん、これは、別の仲間とけんかした大木たちが、新天地を求めて移動するありふれた現象なのだが、陽子にはわからない。

間一髪でリングムのしっぽをつかみ、安全地帯へ離れたとたん、

Do Do Do Do Do……。

前方を巨木の大群が帯のように通過した。土煙の晴れた後に、ロボットたちの姿はない。

そのかわり、球体の下に三角帽子をくつつけたソフトクリームみたいなメカが、地上三メートルほどに滞空していた。

「偵察ポッドじゃ！」

リングムの声を聞くより早く、陽子の手から光条がほとばしった。

ポッドは真つぶたつに裂け、しかし、球体はその下端からオレンジ色の炎を噴き上げるや、びゅうんと空高く舞いあがったのである。

「しまった、逃げられた！——また別の戦闘隊がやってくるぞ！」

「どうしましょ？」

「とにかく、ロボットを追うんじや。やつら、それほど足は速くない。森の外にステードを待たせてあるのじやろう。それに乗るまえにとっ捕まえねば。——あのう、おくまとかいう代物、わしの考えでは、重大な意味をもつ。この世界とノアの世界の運命にかかわるよな。」

「え？」

「行くぞ、背に乗れ！」

「ええ。」

よほど切迫した事情があるものか、リングムは、はじめてのときとは比べものにならぬ

スピードで森の中を疾走しはじめた。

どことも知れぬ広大な部屋で瞑想めいそうにふけるゼルのもとへ、副官チザムが現れ、搜索隊からのSOSを告げたのは、陽子たちがロボットを追いはじめてすぐのことだった。

「信じられん。たったひとりの小娘に、ウオリアーたちが倒されるとは——まさか……。」  
すさまじい形相にかわったゼルに、チザムは恐る恐る聞いた。

「やはり、あの小娘がレダの戦士では……。」

ゼルは沈黙した。それはチザムの問いを肯定するものであった。

「ですが、ゼルさま。」

と、チザムは不思議そうにつづけた。

「レダのハートの持ち主がすなわちレダの戦士だと、こちらへ招き寄せたとき、お気づきにならなかったのですか？」

「だまれ！　口がすぎるぞ！」

鬼面と化してはなつ怒号に、チザムは蒼白そうはくとなった。

だが、このとき、ゼルの胸にも奇怪な困惑こんわくが渦まいたのである。

——わたしには、あの娘がレダの戦士なのだとわからなかった。いや、考えもしなかつ

た。まるで、誰かにそう仕向けられたかのように……。

いや、そもそも、わたしはどうして、あの娘がレダのハートの持ち主と気づいたのだろうか？

「……ぜ、ゼルさま……。」

チザムがおどおどと声をかけた。ゼルはいつもの冷静さをとりもどし、低い声で聞いた。  
「あやつがレダの戦士なら、ひと筋縄では片づくまい。ロボットの救援には、ヨンガリーとロダンもさし向けろ。」

ようやくチザムの口元に微笑がうかんだ。

「は、すでに。」

と、彼はいった。

陽子とリンガムは、ロボットたちの足跡を尾け、森の出口で高速バイク——ステードの残骸を発見した。

「ふむ。わしらが後を追えぬよう、破壊していったか。——手は詰まったの。」  
暗い顔するリンガムへ、しかし、陽子にはっこりと微笑みかけた。

「だいじょうぶ——わたし、直せるわ！」

「なにい!」

「わかるのよ、なんとなく。この車の構造も直し方も。——見てて!」

いいさま、リングラムも目をむくスピードで陽子の両手が動いた。超スピード状態に入っただの。強化筋肉と骨格と遺伝子が、そのもつ能力を最高度に発揮する。

数秒とたたぬうちに、一台のステードが組み立てられていた。

「部品はみな修理してあるわ。壊すだけじゃなく、ぬきとっていけばよかったのに。」

「すごい。——さ、行くぞ! 動かし方はわかるな?」

「もちろんよ!」

ステード自体のかっこうはバイクに近い。ハンドルの形もそっくりだ。違うのは、すべてをグリップのスイッチで行うことだろう。

陽子が操縦席にまたがり、リングラムがその背にしがみつく。

右手のグリップを軽く回しただけで、エンジンがかかる。陽子は思いきりひねった。すさまじい勢いでステードは走り出した。

どうやら空気を車底から吹き出して浮上、後端のエンジン・ブラスターで前進する方式らしい。

「すごい。時速二百は出てるわよう!」

ぐんぐんと流れ去る景色を眺めながら陽子は叫んだ。

眼の前の地面には、敵の残した空気圧の痕が縞のようにつづいている。

まもなく森ははるか後方に遠ざかり、ステードは荒涼たる平原へ出た。

「ねえ、まえから聞こうと思ってただけど、あなた、この世界一の神学者だったのに、  
どうして、暴力バーの用心棒なんかしていたの？」

リングラムはせきばらいして、

「今日び、神学では飯が食えんでの。」

「ふーん。」

と、陽子はうなずき、すこし考えてから聞いた。

「それとき、この世界、どこがおかしくない？」

陽子は背中にべったりと張りついているリングラムに尋ねた。風のうなりに負けぬよう、  
声をはりあげる。

「なんじやと。どこがじゃ？」

「なにからなにまでよ。森の生き物や樹木にしたって、まるでおとぎ話の世界だし、その  
くせ、こんな機械がそろってる。あなたがわたしと同じ言葉をしゃべるのは学者だからい  
いとして、あのロボットたちまで話すのはどうして？ 話さなければ意思が通じないという、



まるでご都合主義を満足させるためじゃないの。」

「ふむ。」

「それに、どうしてあなた、犬なのよ？」

「むむむ。」

リンガムは考えこんだ。そういわれればそうだ。ところが、自分はそれをちつとも不思議と思わなかった。たしかにおかしい。

「ねえ、レダのハートのレダ、ってなによ？ 食べもの？」

陽子の問いがリンガムに我を忘れさせた。

「ばかなことをいうな！ この世界とノアとを創り、治めていた偉大なる女神の名じゃ。」

「ふうん。その女神とわたしと、どういう関係があるのよ？」

「おぬしは多分、レダの戦士なのじゃ。」

「へ？」

「おぬしのその力、ジ、ョ、シ、コ、オ、セ、エ時代にも備わっていたか？」

「ぜんぜん。」

「だとすれば、この世界へ来てから与えられたことになる。あるとき、ロボットどももいつておったが、それこそがレダ・パワーなのじゃ。」

「だからさ、レダって何者よ？」

「遠い昔のことじゃ……。」

リングムは歌うように口ずさみはじめた。

彼の話によると、この世界と陽子たちの世界「ノア」は、もともと女神レダの涙から生まれたものだという。

生まれは同じでも、比較的平和なノアに比べ、レダには争いが絶えなかった。原始人の段階で行われた石器戦争、青銅と鉄の対決、そして、科学兵器を駆使しての原子力戦争、それは三たび発生し、三たび、レダの力によって世界は復興した。

だが、人々の喜びも束の間、女神レダは、争いの絶えぬこの世界に愛想をつかし、その狂暴さがノアにおよぶことを恐れて、二つの世界の道を閉ざしてしまったのである。

「そして、女神はここのこしたのじゃ。アシャンティの誰かがノアの世界に目をつけ、閉ざされた通路を見いだして侵攻せんとするとき、女神自身はそのもつ力をひとりの戦士に与え、それを防がんとするだろうと……。」

「それが、わたし!？」

あまりのことに、陽子はリングムのほうをふり向いてしまった。

「わっ、前を向け！」

リングムは悲鳴をあげたが、そのとき、陽子の視線に気づいて不審な表情をつくった。  
「どうした？」

「なにかくるわ、地平線の上に——鳥みたいなのが！」

「なにイ！」

眼をこらしたリングムの視界にも、たしかに、黒っぽい点が見えた。それがぐんぐんと大きくなり、やがて羽ばたく鳥状の影を形成した。

「あ、あれは——ロダンじゃ！」

「なによ、それ？」

「ゼルの戦闘部隊中随一の秘密兵器じゃ、空のロダン、陸のヨンガリ——こりや、えらいことになったぞ！ ロボットは後まわし、どこかの岩陰に隠れろ！」

「そんなにすごいやつなの？」

「すごいなんの。ひとたび羽ばたけば——」。  
不意に周囲が暗く翳った。

「やだわ、雨でも——」。

ひよいと頭上を見上げた陽子の顔がこわばった。いや、痴呆状態ちほうみたいになつた。つられて見上げたりリングラムがぎゃつと悲鳴をあげた。

ついさつき、はるかな地平の彼方にいた影は二人の頭上を黒々とおおい、とてつもなく巨大な怪鳥と化して滑空してゐるではないか。

翼端から翼端までは優に三百メートルを越え、しかも、どういう生物学的理由に基づくものか、翼は四枚もあるのだ！

腹部は大きくふくれあがり、その先についてる長い首のはしには、熊を思わすごつい顔が黄色い歯をむきだしている。

パラパラと頭上から雨みたいなものが降ってきた。

「やだ、なによ、この雨——くさあい！」

「雨ではない。やつのよだれじゃ。考えるに、腹が減っておるらしい。」

リングラムの言葉の意味を知って陽子は凍りついた。ロボットどもはなんとか片づけたけれど、こんな化け物とどう闘えばいいのか。しかも、相手は空の上にいる。

ふと、父と母の顔がうかんだ。ちよつと変わつてゐるが、いつも自分を守り、かばつてくれていた二人。あの二人がそばにいるかぎり、陽子は生活の不安におびえもせず、心が傷つくこともなかった。



父さん、どうしよう!?

いきなり、陽ざしが復活した。

ロダンがぐーんと前方へ羽ばたき去ったのである。

「いかん、衝撃波が!」

リングムの叫びを陽子は空中で聞いた。巨大な羽が大地へたたきつけた凄絶な衝撃波を、もろに食らったステードは、二人を乗せたまま枯れ葉のように空中へ舞った。

天地が回転し、風圧が肋骨をきしませる。大渦へ入りこんだようなものだった。

「えーい、くそう!」

元氣をつけるための声をふりしほり、陽子は思いきりステードのグリップをまわした。ブースターが火をはく。しかし、あまりに猛烈な風のため、前へ進んでくれない。

「そうだ! あの剣!」

考えるより早く、右手が剣の柄にかかった。全精神力を刃に集中し、

「えーい!」

渾身の力をこめて振った。陽子自身にはわからなかったが、レダの戦士の力は奇蹟を生んだのである。

刃は触れた部分ばかりか、その後方に広がり、押し寄せる空気の壁さえ切断してしまっ

たのだ。

一瞬、無風のすきまがぼつかりと口をあける。ステードのブースターがその中で火を噴き、あつというまに二人は安全な空間へとびだしていた。ふたたび滑走を開始する。

「やったわ！」

「安心するにはまだ早い。ロダンは——また来るぞ！」

そのとおりだった。

すでに数キロ先をゆうゆうと羽ばたいていた黒い影は、脱出した二人を見つけたか、ぐいと方向を変え、真っしぐらに襲いかかってきたのだ。

ぐいと陽子のステードも急降下する。

「あつ、あそこに街が！」

リンガムが叫んだ。

三百メートルほど前方に、石の塔とおぼしき建造物がいくつもそびえている。かなり広い都市の廃墟だ。原子戦争の名残だろうか。

陽子は一気にその一角へステードを向けた。

近づくと、石づくりの街路や街並みがはつきりと見えた。しめた！ ロボットたちのステードの痕も街の奥へとつづいている。

陽子はその中でもとくにがんじょうそうな建物のひとつにとびこんだ。ステードのエンジンを切り、壁に身をひそめる。

「やりすごせるかしら？」

「わからん。それに、ロダンには子分がおるて。」

「子分？」

「まあ、見ておいで。いかにやつでも、これほどがんじょうな都市を風だけで破壊するのは無理じゃ。——ほれ、来たぞ。」

かたわらの窓の外を、ぐおうと黒い影が通過していった。ほこりが舞いあがり、もろくなっていた石の塔のてっぺんが崩壊する。猛烈なほこりが吹きこみ、陽子は悲鳴をあげなかった。

何度か街の上を滑走し、上からでは発見できぬと見たか、怪鳥はすこしの間上空に停空していたが、じき、新手の、驚くべき攻撃に移った。

ふくらんだ腹が縦一文字に裂けると同時に、ばらばらと黒っぽい物体が空中に躍おどつたのである。まるで子供を産みおとすような奇怪な眺めであった。もっと異様なのは、怪鳥ロダンは明らかに生物なのに、その腹から出現した物体は、陽光を銀色にはねかえす美しいメカだったことである。



「なによ、あれ!？」

陽子がうす気味悪そうにつぶやくのに、リングムはそつと耳打ちした。

「やつの子分——攻撃・索敵ポッドじゃ。あやつは腹の中に工場があつてな、空気や土や生物すべてを材料にして、あのようなメカをこしらえることができるのじゃ。」

「じゃ、生きたメカ工場!？」

「そういうことだの。」

「やあだ。気色悪い。」

のんきなことをいう陽子だが、それどころではなかった。

ロダンから吐き出されたメカ——攻撃・索敵ポッドは、街の上空でまばゆい火炎をほとばしらすや、数体ずつかたまって街路へ降下、地上一メートルほどをゆっくりとすべりながら、目についた家へ、いきなり頭頂部から真紅の光線を溶びせかけたのである。

強力な熱線だったらしく、石づくりの家もあつというまに灼熱<sup>しゃくねつ</sup>し、分子の張りを失って崩れ落ちていった。無差別破壊<sup>ジエノサイド</sup>だ。かなりのスピードからいって、陽子のひそんだビルまでやってくるのに、あと十分とかかるまい。

「どうしよう?」

陽子は首をひねった。

リングムの頬<sup>ほ</sup>を脂汗<sup>あぶらあせ</sup>が伝わった。

## ●第4章 奇界アシャンティ

だしぬけにグラリと大地が揺れた。

「地震だわ！」

陽子の叫びにリングラムは首をふった。

「違う。こんな揺れ方じゃせん。」

そういえば、二人の身体は同時に縦と横へ動いてはいないか。

「ひよっとすると——。」

リングラムがつぶやいた。希望と恐怖がその面貌を横切る。いつさい不明のまま、陽子はないを思ったか、ステードのかたわらにしゃがみこみ、エンジン部をガチャガチャやりはじめた。

「あっ!？」

陽子の声にも驚きがこもった。

震動で家々の石壁が崩れたためではない。地面へおちるはずのその破片がものすごい勢いで宙をとび、攻撃ポッドに激突したのである。

金属性の外皮がひしゃげ、断末魔の放電光が空気を青くそめた。ポッドはつぎつぎと地に墜ちた。

「やはり、そうじゃったか！」

リングラムが窓の外へ眼をすえながら叫んだ。

「なにがそうだったのよ!」

「いまにわかる。見ておれ。この街は、ただの街ではなかったのじゃ。」

「え?」

いぶかしげに細められた陽子の眼が、窓の外の光景に大きく見開かれた。

生き残りのポッドが空中高く舞いあがったかと思うと、地面上の破片がそれを追って宙を跳んだのである。

逃れる術もなく、ポッドは撃墜されてしまった。

「こ、これはいつたい……。」

陽子が驚きのあまり、立ちすくんだとき、ぐい、と身体が引かれた。

「きやつ。——この街、走ってるう!」

そうなのだ。

荒野にそびえる広大な廃墟は、いま、砂煙をあげつつ、赤い砂漠を滑走しはじめたのである。

「ステードに乗れ、ジョシコオセエ——街に隠れたやつらを探しにいくぞ!」

「え? でも、とつくに逃げちゃったんじゃない?」

「いや。捕らわれておる。この街にな。ぐずぐずしてるとわしらも危ない。」

「？」

わけがわからぬまま、陽子はリングラムを背に乘せ、ステードを発進させた。地震はつづいているが、なんとかうまくいった。

ポッドが火を噴き、爆発する破片をかわしかわし、ロボットたちのステード痕あとがのこる街路へ出た。

ふりあおげば、頭上をロダンの異影が舞っている。

「つぎに打つ手を考えてあぐねておるな。やつも、この街の正体がわかったとみえる。」  
リングラムがおもしろそうにいった。

「なによ、それ？」

こう聞こうとして、陽子は沈黙した。ステードの痕が道の途中で切れているのだ。不安が首筋をなで、思わずステードのスピードをゆるめる。

いきなり、道がぱくりと口を開けた。どこかの隠しドアが開いたひらという感じではなく、つぐんでいた口が開いたあと思えない。

悲鳴をあげるひまもなく、二人は黒いならくへ落ちていった。

それでもステードのブースターを全開させたのは、レダの戦士はやわぎならではの早業だったか

もしれない。

なんと、地上滑走専用のはずのステードがふわりと空中に浮いていたのである。

「なんじゃ、こんな細工、いつやった？」

「さっき、家の中でよ。簡単な構造のメカね。」

「恐ろしい力じゃ——さすが、レダの戦士。」

リングムにはいまの境遇より、陽子の能力のほうが驚異的のらしかった。

一方、陽子は、空中から見おろす巨大な穴の内部に目を丸くしていた。

全身が絨毛立ち、流れる血液まで冷たく色を失っていくようだ。それほど眼前の光景は奇怪だったのである。

上下左右すべてが、珊瑚さんごを思わせる白い枝状のものでおおわれ、一見、硬質らしいその表面に、おびただしい数の物体が張りついているのだ。

人間らしい影もある、動物にちがいない八本足の生き物、いや、明らかに車とおぼしきメカや、さっきみた攻撃ポッドとより二つのものもあった。

恐ろしいのは、そのどれもが動き、うめいていることだ。

どうやら、珊瑚の枝にくっついたきり、死ぬまで解放されないらしい。

いや——そうではなかった。

闇に慣れてきた陽子の眼が映したものは、果てしなく広がる空間の連なりと、そこを埋めつくす、時代を超えた犠牲者であつたのだ。

手に石斧いしおをもった毛むくじやらの原始人がいる。青銅の鎧よろいをつけた古代戦士がもがいている。どんな生態系にも属さぬような怪物、怪獣が無気味に四肢をけいれんさせている。

おそらく何百万年も前にこの穴の虜とりとなり、それ以後ずっと生かされているのであろう。

「なんのために……よ？」

陽子は茫然ぼうぜんとつぶやいた。

「この街が——いや、この街の下に巢食う生物が生きつづけるためにじゃ。」

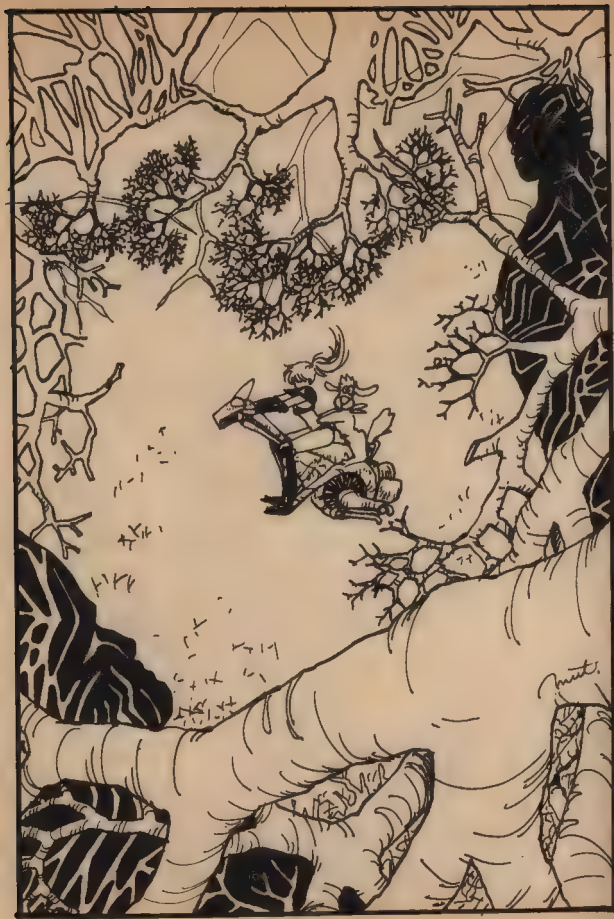
リンガムが低い声でいった。さすが神学博士。だてに年はとっていないとみえる。

「……この世界でも半ば伝説化されておった地底の魔獣、トランバスじゃ。一千五百年前、最後の一匹が退治され、それきり絶滅したと信じられておったが、ふむ、まだ生きていたか。」

「それより、あの犠牲者たちはなんなのよ？ 原始人や大昔の戦士までいるじゃない。どうして、いままで生きてこられたの？」

「トランバスは、生き物を食うだけではない。生命エネルギーならば、体内の生体核炉で自給できる。やつの恐ろしさは、吸いこんだ生物に対する際限なき好奇心にあるのじゃ。」





「好奇心——？」

「つまり、やつは、捕らえた獲物のすべてを知りたいわけじゃよ。わしがおぬしの能力に興味をもっておるように。」

「それで、知りつくすまで生かしておくわけ？ 栄養を与えて？」

「そうじゃ。哀しいことに、トランパスの知能は、その好奇心に比してあまりにも低い。おそらく、小石ひとつのすべてを探るにも、数十万年を要するだろうて。」

「なんてこと……生殺しなまごろじゃないの!!」

「さよう。だからこそ、伝説的な魔獣なのじゃ。」

このとき、陽子の耳には、生きたまま研究材料にされたものたちの、呪詛じゆともとれる苦痛の叫びがきこえてきた。

いや、それは哀願であつた。

死なせてくれ

と、彼らはいっていた。

楽にしてくれ

殺してくれ

と。

無惨な光景に、哀しみと憤りをおぼえながら、しかし陽子には彼らの願いをききとどけることはできなかった。

「さ、ロボットどもを探して、レダのハートを奪い返すのじゃ。」

苦悩する陽子の心を知ってか、リンガムはやさしくいった。

陽子もうなずき、ステードを降下させた。白い枝に触れぬよう前進する。

あちこちで火花があたり、絶望のため息がもれた。どのような武器を駆使しても、枝からは逃れられないらしかった。

降下がつづくにつれ、陽子は不安に胸をつかれはじめた。

いったい、この怪物の体には、大きさの限界があるのだろうか。もう、千メートルちかく潜っているはずなのに、ちっとも底が見えない。

ふんと、陽子の鼻孔を、たばこの匂いらしいものが刺激した。

十メートルほど下で、太った戦士らしきおっさんが、パイプみたいな品をふかしている。

みように陽気な雰囲気。陽子のほうを見てにこりと笑った。

この男ひとに聞いてみよと。

陽子はステードを降下させた。

「あのう。」

といいかけて、気がついた。日本語が通じるだろうか？

「なにかね、かわいいお嬢さん。」

男はやさしい声でいった。父に似た声で、日本語だ。どうなってるんだろ。まるで都合主義じゃないの。

「こんな形のロボット、見かけませんでした？ そいつ、こういう四角い箱みたいなの持ってるんですけど。」

「ああ、あいつらか。もっと下へ墜ちていったよ。」

男はにこにこしながらいった。

「たいていはこの辺にひっかかるんだが、運がいいのか悪いのか——ま、もうすこし下にいるだろう。」

「あのう。」

と、陽子は聞いた。

「あなたはすごく楽しそうに見えるんですけど、いまの境遇が苦にならないんですか？」

「ぜんぜん。」

と、男は首をふった。

「そりゃあ、快適とはいいいがたいが、わしみたいななまけ者にはもってこいの生活さ。こ

の鎧よろいを見たまえ。わしはこれでも戦士でね。戦場から脱出する途中、こいつに捕まってしまったのだ。しかし、お嬢さん、国の都合で戦いに出かけ、なんのうらみもない連中を斬り殺したりするよりは、いまのほうがずっと幸福さ。ま、わしといっしょに落っこちたやつで、いまでも脱出して戦場へかけつけようともがいてるのもいるが、人間、自分がよしと思ふ生き方をするのがいちばんさ。」

「そのたばこはどうしたんです？」

「これかね？」

男は感慨深そうにパイプに眼めをやり、

「わしがあまりおとなしいというので、生物が合成してくれたのだ。いわば模範囚の恩典だな。」

「へえ。」

「ところで、あんたがた、ロボットを探しとるのかね、それとも、あの四角い箱を探しとるのかね？」

「どちらかというと、箱のほうです。」

「なんだ。なら、ここにあるよ。」

へ？ とときもをぬかれた二人を無視し、男は鎧よろいの内側から、ヘッドホン・ステレオを

とり出した。まちがいない、本物だ！

「さっきのやつが、墜おつこちてく拍子に手放しちまったのさ。うまく拾えてよかった。なんせ、この枝にくつついたら、どんなもんでもはがせっこないんだからな。——ほれ。」

「ありがと。」

陽子は礼をいってヘッドホン・ステレオを受けとった。

「それじゃあ、さよなら。達者でな。」

男がちよっぴり寂しげにいった。

「さよなら。」

陽子もうなずいてステードの上昇スイッチを押す。

手をふる男の姿はみるみる闇に溶けた。

「おかしいわ。」

陽子はつぶやいた。

「なにがじゃね？」

「あの男の人、日本語をしゃべれたわ。それに、運よくヘッドホン・ステレオを手に入れたなんて。まるで、わたしたちにくれるためみたいよ。」

「ふむ。——そういえばの。」

リングラムも考えこんだ。

そうのんびりしてもいられなかった。

頭上で鈍いうなりがとどろいたと思いきや、ぱつと陽光がさしこみ、二人の周囲を岩の破片みたいなものが舞いおちていったのだ。

「爆撃じゃ。ロダンのやつ、わしらの中へ吸いこまれたのを知って、体内工場で爆弾をつくりおったんじゃない。」

「なんて気色の悪い怪物なんでしょう——もう、許せない！ 行くわよ。」

頭上の爆撃もなんのその、陽子は一気にステードを急上昇させた。

ぐわつと陽光と火花が周囲に炸裂する。

街は炎に包まれていた。ナパーム攻撃だ。

「まるで、ベトナム戦争じゃないの。ようし。」

ステードの機首をロダンに向け、陽子は全速走行に移った。

黒い怪鳥は、頭上百メートルをゆうゆうと羽ばたいている。

その身体がぐつと下降した。陽子たちを見つけたのだ。

ぱくりと胴体が開き、三角翼のジェット戦闘機みたいなものがとびだしてくる。

「迎撃戦闘機じゃ。手強いぞ！」

「まっかしとき！」

陽子は思いきり、ハンドルをきった。

周囲を白い光が走る。

レーザーだろう。この世界もノアも、昔は自由に往き来できたというから。基本的な科学技術の発達みたいなものは、同じコースをたどるのかもしれない。

ステードに武器はゼロだ。

陽子は剣をぬいた。

殺到するレーザー・ビーム。

剣は陽子の意志とは別に動いた。

つぎの瞬間、迎撃機は自らの送りだした光線をどてっ腹に受け、空中に四散してしまっ  
た。

陽子の剣は光をすべて攻撃側へ送り返したのである。

「うおっほ、すごいぞ、ジョシコオセ！」

リングラムが夢中で陽子の肩をたたく。

「ヨーコって呼んで！」

叫びざま、陽子は反撃した。ビームが真後ろを切り裂く。ぎゃっとリングラムが悲鳴をあ



げた。

「どうしたの!!」

「くそ、しっぱの先をこがされた!」

それを笑うだけの余裕が陽子にはあった。

「ロダンはどうっておけ。レダのハートを手に入れたいじょう、あとは逃げるが勝ちじゃ。」

「そうはいかないわ、見て!」

陽子の視界を、上空から飛来する巨大な黒影が埋めつつあった。

熊のような顔が牙をむきだし、翼の両端には、かき爪ツメが光る。

「降下せい、ジョシコオセ。この土地から離れるのじゃ!」

「だって!」

「見ろ、下を!」

いわれて陽子は下方を向き、言葉を失った。

下の街。いや、地中の巨大生物トランバスが獲物を集めるために生みだした、いわば疑似餌ええのあちこちに穴が開き、炎や煙とともに、なにやらひよろ長いものが空中へ噴きあげたのである。

それは一本にまとまった、あの珊瑚さんごの枝であった。

大事な餌えさを破壊されて怒りくるったものか、トランバスの触手はうなりをたてて、ロダンの全身に触れ、その動きを封じたのである。

「いまじゃ、逃げろ！」

リングアの号令もろとも、陽子はステードを全速発進させた。

三キロほど離れてふりかえる。

迎撃機は追ってこなかった。すべて、あの枝にからめとられてしまったのだ。

「枝がロダンをひきずりこもうとしてる。」

陽子はつぶやいた。

「いや、あの怪鳥はゼルの軍でも屈指の化け物じゃ。そう簡単に獲物の仲間入りはせんぞ。」

「でも、どんどん下降してくわよ。——ああっ!？」

陽子の声は、ロダンの下降がとまり、じわじわと上昇していく姿を認めたからであった。

羽は動かない。いや、ゆっくりと羽ばたいている。それだけの推力で、全長三百メートルもの巨体が、トランバスの力にさからって宙へのぼっていくのだった。

下方からすさまじい閃光がロダンの胴体に命中した。バチバチと音をたてて、全身に触手を広げていく。超高压放電だろう。ロダンが熊面くまづらを歪めて絶叫ぜつきようした。ぐうつと体勢が崩れる。

そのときであった。

頭上の雲間からなにやら巨大な球体が姿を現したかと思うと、その底部がはぜ割れ、一個の人影を宙に放ったのだ。地上五百メートルの上空から。

「あれは？」

「敵の救援隊じゃ。そして、あの影は巨大兵士ヨンガリー。」

リンガムの声も血の気を失っていた。

まもなく、そいつが落下した轟音<sup>ごうおん</sup>が地軸をゆるがした。

もうもうたる砂ぼこりがあがり、視界をおおうなか、なんとも巨大な影がぬうと立ち上がった。

それは、身長五十メートルにも達する石づくりの像であった。

どどん、どどんと大地をゆるがせ、地割れを起こしつつ、決戦場へと向かう。大地の震動は、陽子たちのステードまで震わせるほどだ。

「体重五万トンはあるそうね。」

陽子をつぶやいた。逃げるのも忘れ、奇怪な決戦に見入る。

トランバスに近づくや、ヨンガリーは大きく右手を上げ、ロタンをからめとった枝へと振りおろした。数万トン分のパワーを有していたであろう。

それがぴたりと停止した。

奇怪な枝は巨人の豪腕すら動きを封じたのである。

「わっ、すごい。ね、近くで見よう。」

興奮しているなり、陽子はリンガムの返事も待たずステードを決戦場へ向けた。

「こ、こら、早く逃げねば、こら！」

リンガムがあわてても、ステードはすでに怪物たちの全身が眼の中いっぱいにとびこんでくる距離まで接近していた。

「ほうれ、がんばれ、がんばれ。」

と、陽子がロダンに向かって手をたたく。

熊面くまづらがそれを見て、眼と牙をむきだした。

「こら、よせ、挑発するな！」

リンガムのあわてぶりが、陽子をいっそう、悪ノリさせた。

「やーい、やーい、熊の顔した鳥、ここまでおいで。おまえの母さんデベソ。」

ロダンがひと声高く叫んだ。完全に逆上している。自分の言葉がどんな結果を招くか、陽子はまだ理解していなかった。

ゆっくりと、ロダンの羽が動きはじめた。

「あつ、枝が折れる！」

ポキポキとはじける音が陽子たちにもきこえてきそうだった。

あれほど強固な粘着性をもったトランバスの枝は、ロダンの羽の動きに耐えきれずへし折れ、いまや飛行能力を回復した怪鳥は、全身をわななかせて羽ばたいた。

すさまじい突風が大地をたたく。

負けじとヨンガリーも手足もふりまわす。

じりじりと、胴のみしばりつけられたままロダンは上昇していった。

「……地面が……トランバスが……出てくる……。」

陽子は自分の声さえ意識していなかった。

すさまじい光景だった。

からめとったのか、からめとられたのか、陽子の眼下で、石づくりの街は震えながら大地を離れたしたのである。

それに伴い、街の周囲、直径ほぼ五キロにわたって円形の亀裂が走り、なにやら巨大な甲羅こうらのようなものが浮きあがってきた。

「あ、あれが、トランバス……。」

「そうじゃ。わしもはじめて見る。すごい、いや、すごい。」

それはトランバスの巨大さを示しているのか、ロダンの飛行能力のすさまじさに驚嘆しているのか。

全長三百メートルの怪鳥は、直径五千メートル、重量は数十万トンに達する地底生物をいま、白日のもとにさらしつゝあった。そればかりではない。優に五万トンを超すヨンガリーも捕縛はづされたまま宙にういている。

ゼルの配下とは、これほどの力を秘めているものなのか。——陽子は全身に冷たい汗のしたたりを感じた。

だが、トランバスの巨体もけたはずれの迫力をもっていた。

これが生物の身体だろうか。

陽子たちの潜んだ街など、東京の一區にすぎなかった。地中に隠れた本体は形容しがた  
い色彩の甲殻で、それがすこしずつ大地からしぼり出されるごとに、地面には幅広い亀裂  
が走り、その長さは十数キロにも達した。

ふたたび稲妻が上空へと走った。

ロダンが絶叫ぜっきようし、光に包まれる。

別の怒号が陽子の眼めをみはらせた。

ヨンガリーだ。

単なるでくの棒かと思われた石の巨人の全身が赤く染まったのだ。

すさまじい熱風が頬をはたき、陽子はあわててステードを後退させた。

巨人は火を噴いていた。いや、全身を炎と変えていた。

白光と熱気がふくれあがり、荒野を白くそめた。

ついに、トランバスの枝は炎に包まれた。急速に粘着力を失い、ロダンとヨンガリーを解放してしまう。

想像を絶する巨体が数メートル落下する。正確には、下端はまだ地中に埋もれているのだから、めりこみなおしたというべきだろうか。重々しい衝撃波と落雷の轟音が平原をわたっていった。

地中へ潜行しようと土を噴きあげる巨体ヨンガリーが飛び乗り、甲羅をなぐりはじめた。空気がゆれ、火花が散る。

いけない！

陽子はトランバスの体内でたばこをふかしていた戦士のことをおもいだした。あんな灼熱怪物に内側へ入られたら、あの叔父さんもやき殺されてしまう！

陽子は急降下に移った。

ロダンがそれを見つけた。ふたたび腹が開き、迎撃機が放出される。猛スピードで迫っ

てきた。

陽子にはやりと笑った。不敵な自信が笑みに満ちる。

背後からのビーム攻撃にもかまわず、ヨンガリーにつっかけてた。リングムの悲鳴。陽子は叫んだ。

「あたしはこの鎧よろいを着ているから平気だけど、リングム、耐えきれなくなったらいつて！」  
「もうだめじゃ！」

「オーケー！」

ステードは急旋回に移った。

ヨンガリーの鼻先だ。

ぐうっと手が伸びてくる。

間一髪でかわしたところへ、迎撃機が突進した。ステードほど小まわりの効かぬ迎撃機はヨンガリーの手にぶつかり、火花と黒煙を噴きあげた。

ヨンガリーも大きくのめった。

陽子たちをつかみきれないまま、自重のせいで体勢をたてなおせなかったのである。わりとだらしないかっこうで甲羅こうら上につんのめる。

このすきに、トランパスは巨体に似合わぬ素早さで、土中に姿を消してしまった。





すこし遅れて、ヨンガリーが跳ねあがってくる。

「やったぞ、ジョシコオセエ！」

リンガムが感激の叫びを発した。

「ちゃんとつかまってる。脱出よ！」

陽子は地上すれすれでステードを突っ走らせた。ごうごうと空気が左右へ吹っとなでいく。

「なんじゃ、このスピードは!? ステードの限界を越えとるぞ！」

「改良したっていったでしょ。」

「なんとすごい娘じゃ、おぬしは!!」

半ば自慢げな笑みを口元にうかべながら、陽子は、離れぬ疑問がまた湧き上がるのを感じた。レダの女神が与えた超能力か。でも、こんなに、なんでもできる力なんて常識はずれすぎる。SFの中だって、テレパシーとかテレポーション、サイコキネシスなんかに限定されてるじゃないの。なにしろ、ひと目内側をのぞいただけで、エンジンの構造から出力、改造箇所までがわかつちゃうんだから。

スババツと左右に炎が噴きあがった。

後方から迎撃機の襲撃だ。二機残っていたのだ。

「む、しつこい！」

陽子は剣をぬいた。片目で前方、片目で刃に映った敵機を見る。

岩山が迫ってきた。奇岩が群れをなしている。丸いのや正三角形、円錐えんすい、星形と、まるで異次元の世界だ。

陽子は右手をのばして、計器盤のカバーをはずした。複雑なメカの一部に人差し指をあてる。

「なにをしておる？ また改良か？」

リングムがあきれたようにいった。

「そうよ。えーん、うまくいかない。景気づけになにか歌ってよ！」

「まかしとけ。わしゃ、こう見えても歌手志望だったんじや。いや、おふくろの畏わなにかかって、歌謡学校のつもりで出した願書が、神学校のものだったとは……。」

「いいから、歌ってよ！」

「よし！」

リングムはだみ声を張りあげた。

アシャンティ 闇は遠く去り

アシャンティ 光みつる国

レダの夢 山河を守り

レダの声 幸を招く

レダいずこへ消えいくとも、

アシャンティの民 災いを恐れず

戦士 永遠の国より訪れ

暗黒をはらうべし

犬にしては洩い声だった。

「やった！」

陽子はシートの上で小躍りした。

「そんなにいけるかの？」

「ちがうわ。細工が終わったのよ！」

「なんじやい。」

リンガムはふてくされたが、それどころではなかった。

ふたたび左右に火柱が立ったと思いきや、前方の巨岩がぐらりとゆれて落ちかかってき

たのだ。

間一髪、陽子はその下をすりぬけた。

「岩を狙ってきたわね。——ようし。」

ぐん！ とステードが急上昇した。

方向転換に伴う圧力を予想してリングムは眼を閉じたが、強烈なGは感じられなかった。

陽子の「細工」だ。

大地と空が反転し、敵機が眼前に迫る。

方向を転じるすきも与えず、陽子は剣をふるって、その鼻面を切断した。

センサーとスタビライザーが火を噴き、迎撃機は大きくかしいで、地面に衝突した。

残り一機の放つレーザーを巧みにかわし、陽子は再度、低空飛行に移った。敵もついてくる。さいわい巨岩の間を走る通路は複雑なのでもう、レーザーの照射を浴びることはない。

陽子は敵のスピードと方向転換能力を計算していた。

——つぎの角で決着をつけるわよ

不敵な笑みが浮かんだ。ぐいとアクセルをふかす。

左手にそびえる逆三角の巨岩の底へ刃をきらめかす。

ゆっくりと落ちかかってきた。

敵がスピードをおとす。

陽子は思いきりアクセルを逆回転させた。

空間の一点に停止したまま、コマのように半回転し、敵めがけて突っこんだ。

この方向転位能力こそ「細工」の成果だった。回転自体に百分の一秒もかからず、二人にはGもかからない。

急激な突進にあわてた迎撃機はとっさの判断で空中へうかび、ステードとすれちがった。後を追うべく反転に移るが、こちらは前進しながら方向を変えねばならない。

わずかにスピードをゆるめた場所こそ、巨岩の真下だった。

三角形の巨大なハエたたきに押しつぶされたかのように、のしかかってくる巨岩と大地にはさまれ、迎撃機は爆発した。サンドイッチの切れめから毒々しい炎がはみで、急速に拡散する。

「よっほっほ——やったぞい！」

リングラムが夢中で陽子の背をたたき、悟りきったはずの神学者は子供のように興奮していた。

「さ、早く逃げて、どこかでヘッドホン・ステレオ聴かなきゃ。」

陽子もほっとしたようにつぶやいた。

不意に日がかげった。

一瞬のうちに、陽子は事態をのみこんでいた。

まだ、ロダンがいたのだ！

頭上をふりあおぎ、陽子もリングラムも愕然と口を開けた。

ロダンの足にヨンガリーがつかまり、ステードを見おろしている。

まさか、いくら怪鳥といっても五万トンの石像を輸送してくるとは。

「いかん、逃げろ！」

リングラムの言葉が陽子の呪縛を解いたときは遅かった。

ヨンガリーのしわだらけの口がかつと開き、二抱えもありそうな炎の柱がステードを襲った。

陽子の手はアクセルではなく長剣に走った。

熱気がステードの鼻先をかすめ、先端部が炎に包まれた。火炎のはしに触れたのである。ぐらりとステードは傾いた。

「きゃあ!!」

悲鳴をあげながら陽子が剣をふるったのは、反射運動ではなく、遺伝子にたたきこまれたレダの戦士としての能力のためだった。

ふりおろされた長剣は、もろ二人にむかつて吹きつけた火炎をみごと、二つに断ち切っていたのである。

二条の線が二人のわきをすぎ、熱波に皮膚を灼<sup>や</sup>かれたリンガムが悲鳴をあげた。

必死にハンドルを操作する陽子だが、鼻先から火を噴<sup>ふ</sup>くステードは、ようやく前進したものの、前とは比較にならぬスピードしかでない。

「ロダンに狙われたらえらいことだぞ！」

「わかつてるわよう！」

陽子は叫んで周囲を見まわした。どこかに隠れるところは――。

あった！ ニキロほど前方の岩壁に、大きな洞窟が開いている。

空気が熱を帯びた。

「ヨンガリーが燃えておる！ 早く逃げんと、このあたり一帯は灼<sup>しゃく</sup>熱<sup>ねつ</sup>地獄じゃぞ！」

「了解。」

ステードが発進したとたん、背後で熱気が爆発した。

巨岩が溶け崩れ、大地と合体して煮えたぎった。ヨンガリーの直撃である。世界は炎に包まれた。

「だめだ、逃げきれない！ ——ようし！」



なにを思ったか、陽子はステードを急上昇させた。悠然と羽ばたくロダンに迫る。距離は五百メートル。

「なにをする!？」

「ロダンとやりあうのよ。いくらヨンガリーでも、仲間は灼けないわ。」

「なるほど!」

ヨンガリーの熱気が追尾してきた。

陽子は必死で上昇をつづける。ロダンの熊面くまづらが眼前でほえた。

それが苦痛の表情に変わったのはつぎの瞬間であった。

腹部から炎があがるのを見て、陽子は慄然りつぜんとなった。ヨンガリーは、仲間の生死も顧みかえりず、全身を灼熱させたのだ。

石の巨体が急に小さくなった。

ロダンがヨンガリーの手をつかんでいた後足を離したのだ。巨人は、自ら灼けただらせた大地へ吸いこまれていった。

ほとんど同時にロダンも空中でのたうった。腹の炎を消そうと眼を離したすきに、陽子の剣が顔を切り裂いたのだ。

並の剣でも戦士でもない。レダの剣とレダの戦士だ。

顎<sup>あご</sup>から額<sup>ひたい</sup>にかけて一筋の赤い線が走り、みるみる太さを増すや、ぶちこわれたダムのごとくに、鮮血がほとばしり出す。

信じがたい声で鳴きながら、上空へ去っていく。

「みごとじゃあ！ あ、あいつらを、二匹もそろって撃退するとは——やはり、レダの戦士！」  
「それより、洞窟<sup>どうくつ</sup>よ。」

陽子は溶岩の流れと化した大地へ軽く目をやり、ヨンガリーの姿が消えているのを確かめてから、ステードを岩壁に向けた。

内側はかなり広かった。

壁も床もすべすべして凸凹が少い。

「これ、ただの洞窟じゃないわね。なにかの通路とちがう？」

ステードの機関部を調べながら陽子が聞いた。

「そのようじゃな。」とリンガムも同意した。

「そういえば、たしかこのへんに、レダの神殿があるという噂<sup>うわさ</sup>を耳にしたが。」

「いつごろの噂よ？」

「わしが子供のころ——ざっと三百五十エルグぐらい昔じゃ。」

「わかんないわよ、この世界の単位じゃ。」



「ふむ。そうか——で、ステードはどうなったかの？」

「パーね。完全にイカれたわ。すこしは動くけど、走りだしたら五分ともたないわ。」

「わしもおぬしの世界の単位はわからんが、非常に短いのであろうな。」

「まあね。——さ、どうしよう。」

「答えはひとつじゃ。う、お、く、ま、を、試、し、て、み、る、こ、と、よ。それでおぬしはもとの世界へもどれる。」

「そうね！」

と、喜色満面の表情が不意にくもった。

「でも、このまま帰っていいのかな？」

「わしのことなら心配はいらんぞ。これより危ないめに何度も遭<sup>あ</sup>ってきた。」

「ちがうのよ。わたしはいちおう、選ばれたのよね。戦士——戦うものとして。その役目をまだちっとも果たしてないような気がするんだ。」

「そりゃ、ま、そうだが……。」

「この世界とわたしたちの世界を悪いやつが征服しようとしている。それを止められるのはわたしだけなのよね、今んとこ。……ほうつといて、普通の高校生にもどるのもいいけど、なにか、すっきりしないな。」

「わしも止めるべきなんじやろうな、ほんとうは。」

リングラムも苦笑を浮かべた。

「じゃが——なあ、ジョシコオセエ、おまえはまだ若い。ほんの娘御<sup>むすめ</sup>じゃ。二つの世界の運命を担うのは残酷すぎる試験というもの。いまおまえが平和な生活へもどっても、誰も文句をいうものはおらんぞ。」

「でも……。」

「行くがよい。」

リングラムはやさしくいった。それがかえって陽子の胸に、強い炎をかきたてた。苦しむとわかつている世界とそこの住人をほうってはいけない。

でも……。

ひょいと、リングラムの手が腰のヘッドホン・ステレオにのびた。

陽子の胸中を察し、自分の手でノアの国へ帰してやろうと思ったのである。

「だめ！」

陽子が叫んでも、リングラムはかまわずスイッチを入れようとした。

大地が震動したのはそのときである。

「うわっ！」

「きやああ！」

はずみでひっくりかえった陽子は、リングムの手をはなれて入り口のほうへ転がっていくヘッドホン・ステレオと、それを受けとめた巨大な手のひらを目撃した。それは石でできていた。

「ヨ、ヨンガリー！——生きていたのね。」

応答は豪腕の一撃であつた。

入り口の壁が四散し、石の破片が陽子をなぎ倒した。

さいわい、レダの鎧よろいをつけているため、けがはない。ヨンガリーはもう片方の手にしたヘッドホン・ステレオを巨大な口にのみこんだ。

「リングム——だいじょうぶ？」

陽子は夢中で尋ねた。

「おお。」

震えをおびてはいても元気な応えこたえがあつた。ステードの陰に隠れて破片の直撃を避けたのだ。

外光が黒い色をおびた。

さしわたし十メートルもありそうな手のひらが通路をやってくる。

二人を握りつぶす気だ。

「リングム、奥へ逃げて！」

「おぬしもいっしょじゃ！」

「いやよ。たかが石づくりのロボットなんかに負けてたまるもんですか。」

陽子の右手には長剣が光った。

躊躇ちゆうちよせず突き進んでくる手のひらと、大きく開いた不気味な指に、渾身こんしんの力をこめてた

たきつけた。

「えーい！」

レダの戦士の刀——刃やいばは折れもせず、ごつい石の指を一本、付けねから切り落としていた。

身の毛もよだつ絶叫ぜつきようが洞窟どうくつをゆるがせた。

石巨人の悲鳴である。痛みを感じる神経はあるらしい。するとロボットではなく生物なのだろうか!?

わななく手のひらへ、陽子は突きを放った。なんの抵抗もなく柄つかまでめりこむ。今度こそ、手のひらは後退した。

「ざまあごらんあそばせ！」

陽子は刀をひるがえした。

洞窟は思ったより深い。

十歩ほど走ったろうか。

猛烈な熱気が背中をたたいた。

ヨンガリーの火炎攻撃だ。洞窟ごと陽子を灼き殺そうとしている。炎は容赦なく陽子を包んだ。

悲鳴をあげかかり、陽子は自分が平然としているのを知った。熱い風呂に入った程度の刺激だけで、焼け死ぬなんて域には遠い。

全身が光かがやいていた。

陽子の身体に集中した熱は、あるレベルに達すると光に変わってしまいうらしい。いまの陽子は、超高性能のエネルギー変換装置に等しいのだ。

「どんなもんよ！」

なお渦巻く炎の中で、入り口のほうにアカンベエをし、陽子はリングガムを追って走った。周囲では灼熱した岩が結合力を失って落ちかかってくる。

「リングガム、無事!？」

大声で叫んだ。



「おう——こっちじゃ。」

返事はすぐにあつたが、どことなくうつろである。なにが起こつたのか。陽子は大急ぎで洞窟の奥へ走った。

「こっち、こっち。」

リングムの声に従うと、右手奥に小さな割れめが見えた。人ひとりがかろうじて横向きに滑りこめるほどの広さしかないが、リングムならわけなく入れるだろう。

陽子もためらいなく潜った。

内側は案外複雑な形で、奥のほうへ道がつづいている。どうやら、過去の地殻変動がもたらした亀裂らしい。炎も入り口どまりで、すこし行くとひんやりした空気が頬に触れた。前方が明るい。

こんな石壁の向こうになにがあるのだろう。陽子は緊張した。剣を握った右手に力がこもる。

ひよつとして、巨大な神殿の残骸があつたりして……。

裂けめから、陽子はそつと顔をのぞかせた。

「あら、当たり前だわ。」

声がしげんにでた。

裂けめから一メートルほど下の床に、リングムがへたりこんでいる。

ふぬけみたいな声も当然だった。二人の前に広がっているのは、なんとも奇々怪々な光景だったからである。

● 第 5 章 ヨ二との邂逅

「ふむ、これが、レダのハートか。」

巨大なテーブルに置いた四角いメカに、美しい瞳ひとみが注がれていた。美しく、そして邪惡な瞳であつた。

いうまでもなく、ゼルである。

正体不明の寶石をちりばめた豪華な衣装も、その美貌の前にはかがやきを失う。かたわらにはべる側近のチザムも、主人の横顔に恍惚こうこつとしてゐるふうだ。

「ロダンとヨンガリー——およそ力仕事にしか役立たぬと思つておつたが、よくやった。では、すぐに、エネルギーの抽出といくか。」

ゼルのしなやかな指がヘッドホン・ステレオに触れた。数分前、ロダンの生んだ偵察ボツドがヨンガリーから預つてきたものである。

「おっ!!」

紅い唇から低い、驚きの言葉がもれた。

ゼルの手が触れたとたん、なんの変哲もないメカ——ヘッドホン・ステレオは、青白い火花を發してその手を打つたのである。

「ゼルさま!!」

チザムが息をのんだ。



~~~~~

「ふふふ……しよせん、レダとわたしはともに天を戴<sup>いた</sup>かざる敵<sup>た</sup>どうし。機械にもそれがわかるとみえる。」

ものすごい顔でこういい捨てるや、ゼルは平然とヘッドホン・ステレオを握りしめた。指の間から電光がほとばしり、青い煙が室内に漂<sup>ただよ</sup>った。肉の灼<sup>や</sup>ける匂<sup>にお</sup>いが鼻孔をつき、チザムは茫然<sup>ぼうぜん</sup>となった。

「レダの戦士はどうしておる？」

ゼルが静かに聞いた。

「は——ヨンガリーが洞窟<sup>どうくつ</sup>に追いつめ、なお攻撃中とかで。」

「ロダンはどうした？」

「生体調整ドックで傷の手当てを。まもなく完治する見込みです。」

「治りしだい、ヨンガリーの救助にさしむけろ、攻撃ポッドと飛行母艦も出すのだ。全力をつくしてレダの戦士を抹殺しろ。」

「ははっ——ですが……。」

「ですが、どうした？」

ゼルの瞳ににらみつけられ、チザムは蒼白<sup>そうはく</sup>となった。

「彼らの逃げこんだ洞窟<sup>どうくつ</sup>というのが、どうやらレダ教徒の……。」

「——あの、神殿の跡か？」

ゼルの顔に形容しがたい動揺の波が広がった。

陽子とリンガムの眼の前に広がっているのは、明らかに古代の神殿とおぼしき廃墟の一部だった。

果ても見えない天井と床を支える石づくりの円柱、そこに彫りこまれた複雑怪奇な意匠。それは、神殿づくりに捧げられたとほうもない労働力と意思の集中を表していた。

「そうか……これが伝説に聞くレダ教の神殿か……。」

「なによ、それ？」

「数千年前、ゼルがノアの世界の征服をくわだてた際、それに反抗するレダ教の組織を完膚なきまでに破壊してのけたのじゃ。これはそのひとつじやろう。——しかし、こんな形で残っているとは思わなんだ。」

「明かりまでついてるわ。」

と、陽子が、どこからともなくさしこんでくる光の源を探しながらいった。

「まだ、神殿の機能自体は生きてるんじゃないの？」

「かもしれない。太古のレダ教徒というのは、わしらには想像もつかぬ高度な科学知識をも

つていたというからの。かのゼルも、そのひとりだったのじゃ。」

「ゼル？」

陽子まゆが眉をつりあげた。

「ゼルって、わたしをこの世界へひきずりこんだ張本人でしょう。悪役じゃあないの。それがもと、レダ教徒だったというわけ？」

「それも最高位の神官だったのじゃ。」

「んが。」

と、陽子は天をあおいで、突然、恐ろしい事実に思いあたった。

「ちよっと、リングム。——あなたいま、数千年前っていったわよね。すると、なに——ゼルってやつはそんなに生きてるわけ？　ずいぶん若かったわよ。」

「若さを維持する方法は、この世界ではさほど困難な技術ではないよ。——現にわしも、三百五十歳になる。」

陽子のため息をついた。そうか、ここは別の世界だったんだ。これからいったいどうなるんだろ？

「ね、奥へいってみよ。なにかあるかもしれないわ。——おなかもすいたし。」

食いけが不安を押さえるとは、レダの戦士もひと皮むけば、十七歳の乙女にすぎないの



だった。

行けば行くほど、神殿の巨大さに、陽子は圧倒されてしまった。

TVでいろいろな太古の遺跡というのを見たけれど、これほどのスケールを備えたものは皆無である。

彫刻の精緻さ、巨大さ、美しさ。

それは明らかに人知を超越した力の結晶であった。

「ねえ、レダの女神って何者なのよ？」

不気味になって聞いた。

「いまとなつては、誰にもわからん。」

と、リンガムは答えた。

「ただ、この世界のすべてにみなぎる強大なエネルギーを、自在に操れる存在だったということは明らかじゃ。その崇高な精神をたたえる信者の数は、最盛期で数千万人にのぼったという。」

「ゼルは、その人たちを裏切ったのね。」

「そうじゃ。数千年前から生きていたといつても、レダの女神が姿を消したのは、さらに数万年以前。その力を恐れるより、自由に操る快感のほうが勝つていたのじゃろう。」

「でも、おかしいわ。彼がノアの——わたしたちの世界の侵略を企ててからいままで、世界にはなんの変化も起きなかったわよ。」

「それはたぶん、ゼル自身に、レダの力を操る能力が備わっていなかったからじゃ。というより、その力をコントロールするためには、レダの心臓ハートがいる。ゼルにも、それだけは見つけれなかったにちがいない。」

「それがわたしのヘッドホン・ステレオ?——さっぱりわかんないわ。それに、どうして、わたしが選ばれなくちゃならなかったのよ?」

「わからん。」

「だいたい、わたしは、こういう世界向きの人間じゃないのよね。平凡な一女子高生にすぎないのよ。」

はじめてつぶやく弱々しい言葉だった。

陽子の胸を、すでに遠くなった世界の光景がすぎた。

ちよっぴり変わっているが、やさしく信頼できる父。もっと変わっているが、陽気な母。涙も笑いも分かち合ってきた級友たち。そして……。

そう。

そして……。

「誰かおるぞ。」

リングムのささやきが、陽子の想いを断ち切った。

前方に四角い出入口が見え、内側の壁に人影が映っている。

陽子の眼が細まった。

髪の形や身体つきからして、女の子のようだ。

しかし、油断はできない。ここは常識の通用しない世界なのだ。

そっと壁にへばりつき、内側をのぞく。

ぶん、といい匂いがした。

今度こそ陽子は仰天した。

これは——この匂いは!?

「カ、カップ・ラーメンじゃないのう!？」

叫んだとたん、口を押さえたがもう遅い。

中の人影が大きくゆれ、

「モゴ——ど、どなたですの!？」

と、口になにか頬ばったみたいな声がした。

さっと陽子とリングムが内側へ入る。

そこにいたのは、陽子と同一年くらいの娘だった。

マントを着ているが、身体からだの露出度は陽子より多く、なかなか色っぽい。

しかし、陽子の眼を注目させたのは、少女が手にした石づくりの円筒形容器と、口からはみ出した湯気をたてる紐ひもだった。

明らかにカップ・ラーメンではないか。

少女の右手には金属製のフォークまでおさまっている。

「そんなもの、どこで買ったの？」

相手が日本語をつかう不思議さも忘れて、陽子は詰問した。

「あなたたちこそ、どうしてここへ来たのよう？」

少女が麵めんをのみこんでから聞いた。

「ひよっとして、ゼルの手下さんですか？」

「ちがうわ。——彼らの敵よ。ひよっとして、あなたも？」

一瞬、少女は疑い深そうな眼で二人を見つめていたが、すぐ柔らかな表情にもどって、

「どうやらほんとうのようですね。——はじめまして、わたくし、ヨニ。レダ教の巫女みこですの。」

「レダ教の巫女!? ——まだ、そんなものが生きのこっておったのか!？」

娘——ヨニはリングムの声を聞いて、眼をそちらに向けた。

「まあ——その姿形。ひょっとして、アシャンティ最高の神学者、リングムさまではありませんか？」

鼻からでるような色っぽい声であつた。媚こひを含むどころか媚だらけだ。同い年とは思えぬお色気に陽子はあきれたが、リングムはたちまち鼻の下をのばして、

「ふむ、まあ……。」

とそっくりかえった。

「まあ、すてきな毛並み。」

と、ヨニはカップを握った手を組み合わせていった。

「わたくし、たまりません。見ているだけで感じてしまいます。」

「わっはっは。」

「いいかげんにしてよ！」

陽子は地団駄を踏んでいった。

「高校生の前でなにさ。——ねえ、それより、そのカップ・ラーメン、どこで手に入れたのよ？」

「あら、これ？」

と、ヨニは石の容器に目を注いでいった。

「レダ教徒に代々伝わる非常用食糧よ、お望みなら、あの棚にたくさんあるわ。」

「ひよっとして、熱いお湯を注いで三分待てっていうんじゃないでしょうね。」

ヨニの眼が光った。

「なんで知ってらっしゃるの？」

「やっぱり。」

およそつまらないことで、女ふたりの間に敵意めいたものが生じたが、すぐリングムが止めに入った。

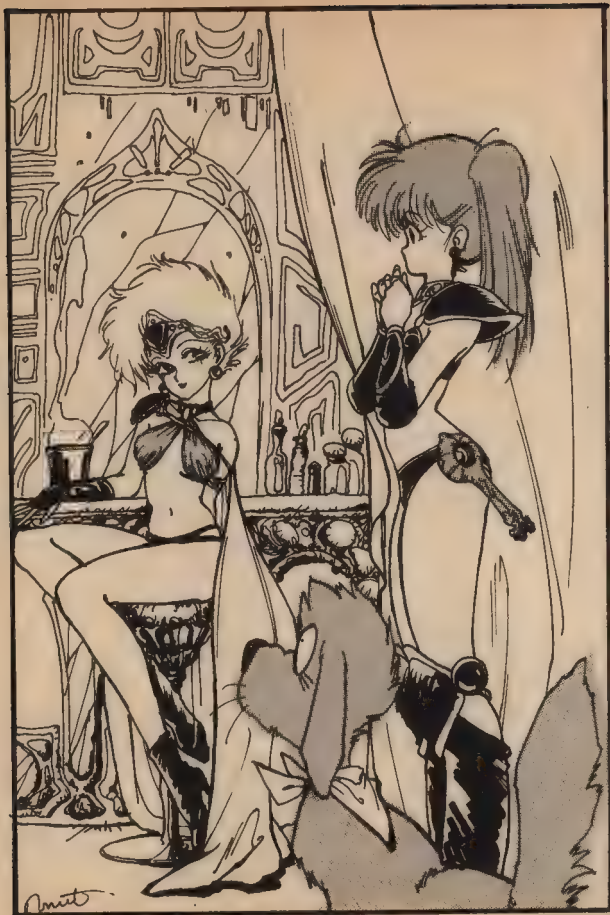
「まあまあ、二人とも、おちついて。ともにゼルを敵とするものではないか。ここはゆっくり話し合おう。」

「そうですわね。」

とヨニがにっこり笑った。色っぽくて媚を売りやすいが、その分、気はいいらしい。陽子も笑い返した。

「さ、こちらへ。」

二人を石のテーブルへ案内し、ヨニは棚からカップ・ラーメンを二つとり、そばのタンクから湯を注いで石のふたをのせ、眼の前に置いてくれた。立ちのぼるスープの香りに、



陽子のおながぐうと鳴る。

「どうして、この神殿食のことご存じなの？」

ヨニが残ったラーメンをすすりながら聞いた。

陽子は返答に困った。

「別に——知ってたわけじゃないの。わたしの世界にも、同じような食べ物があって、父がよく食べてたわ。」

「あなたの世界？」

ヨニが眉を寄せた。

「そうじゃ、レダの巫女に自己紹介を忘れておったの。この子は陽子。ノアの世界から来たジョシコオセエじゃ。」

「なんですって!!」

ヨニが眼を丸くして立ち上がった。なにかも芝居けたつぶりだ。巫女というより、宗教団体の勧誘員か役者に近い。

「ノアはレダの女神によって封じられたはず。そこから、次元の道をたどってやってこれるのは——レダの戦士のみ……。」

「そうじゃ。陽子こそ、アシャンティとノアに危機迫るとき、女神がその姿を借りてよみ



がえるというノアの戦士なんじゃ。」

立ちのぼる湯気の向こうから、リングラムが重々しい声でいった。

外見からはいかなる機能も想像できない不可思議なメカ類の真ん中に、ヘッドホン・ステレオが置かれていた。

ゼルの実験室である。

当人とチザムは、室内を見おろすコントロール室ルームにいた。分厚い特殊ガラスの窓が実験室と二人を隔てている。

「いよいよだ。」

美しい唇くちびるがゆがみ、ゆがんだ声をしみださせた。

「五千年待った甲斐かいがあった。ようやく、レダのエネルギーすべてがわたしのものになる。そうなれば、次元の道を往き来するのも思いのまま。ふふ……つまり。アシャンティもノアも、わたしの膝下しつかに屈するというわけだ。長かったぞ。」

「さようで。」

「五千年探しまわったレダ・エネルギーの波動が、ノアの世界から感知されたときは驚いたが、もはや、運命はこのゼルの手中にある。さ、はじめよ、チザム。エネルギーの正体を

解きあかし、自在に制御する術を見いだすのだ。」

「ははっ。——エフサム・スタート実験開始。」

チザムはうなずき、コントロール・パネルの前にすわったオートマンに指示した。

室内に電子のため息が広がり、窓外ではヘッドホン・ステレオにむかってエネルギー識別カバーが降りていく。

ほどなく、カバーが淡く点滅し、息づきはじめた。

「回答は？」

ゼルが尋ねたとき、

室内に美しい音色が響きわたった。

「ほう——これは、音……そうか、レダのハートの秘密は、音声パターン化して組み込まれていたのか!？」

「さようで。この音は、明らかになんらかの感情を刺激する意図をもつてつくられたもの。その機械は、磁気変化として記録された音を再生する装置です。レダはなんらかの方法でもって、そのエネルギーを音声パターン化し、特定の鍵キにあたる人物の耳に届いたときのみ、エネルギーを解放するよう定めたものと思われます。」

「それが、あの娘か？」

「さようで。」

「わからん。」

「なにが、でございます？」

「あの娘が戦士に選ばれたわけが、だ。ましてや、偶然、あの音声パターンをつくったのか？」

「さて、それは……。」

「わたしがレダのハートの存在に気づいたのは、あのパターンを感知すればこそだ。偶然とはいえ、あれがでなければ、また数千年の時を待たねばならなかったろう。レダの女神が姿を消して数万年——偶然がひとつの曲をつくるには短すぎる時間だ。まして、そのような娘に、戦士たるパワーが秘められていようとは……。」

「……………」

「なあ、チザム。」

非情な主の呼びかけに、不思議ともうの哀しげな響きを感じて、チザムは驚いた。

「ときおり、わたしは運命というものに、怯えすら感じることもある。この世界の存在すべてがじつは、わたしにも想像できぬ大なるものの力によって構成されているのではないかと思つてな。アシャンティ、ノア——すべてはただの幻ではないのか？」

「なにをおっしゃいます。」

チザムはあわてていった。

「ならば、わたくしめがあなたさまとともに過ごしてきた五千年の歴史はどうなります？  
なによりもそれが確実なこと、わたくしたちふたりの記憶と身体からだに刻みこまれてあるので  
はありませんか。」

「そう記憶するよう命ぜられていたとしたら？」

笑いすら浮かべて放つゼルの問いに、チザムは沈黙した。

数秒に満たぬ、しかし、恐るべき時間がすぎた。

ゼルがもう一度微笑した。それはチザムのよく知っている、自信と邪悪さにあふれた主  
のものであった。

「エネルギーの種類がわかったいじょう、それをコントロールするものが必要だろう。」

ゼルはマントをひるがえして自動扉の方へ急いだ。

「わたしが実験台になる。」

## ●第6章 巨人大決戰

「すると、レダ教徒の生き残りは、あなたひとりってわけね。」

ヨニの話を聞きおえて、陽子は嘆息した。

「そういうことなのです。ほかは五千年の間に、ことごとくゼルの弾圧を受けて死ぬか改宗してしまいました。わたしだけがなんとか逃れて世界じゅうをまわり、伝説のレダの戦士を探し求めていたのです。ゼルの野望から世界を救うのは、レダの戦士しかありません。」

「それが、わたしだなんて、荷が重すぎるわ。」

「なんのなんの。」

とリンガムが陽子の肩をたたいた。

「おぬしの戦いぶりは、わしがいつとうよく知っておる。いや、みごとなものじゃ。レダ・パワーの助力があったとはいえ、あそこまでやれば、だいじょうぶ。ゼルとて物の数ではないわ。」

「だといけど——おかしなことが多すぎるものねえ。」

「おかしなこと？」

ヨニとリンガムが同時に眼を細めた。

「このカップ・ラーメンよ。いくらなんでも、ここまでうりふたつというのは、偶然の一致じゃ納得できないわ。もとは自由に往き来できたといっても、二つの世界をつなぐ道が

レダによって封じられたのは何万年も昔でしょ。カップ・ラーメンの力の字もこちらには伝わってないはずよ。それが——ほら、干しエビも乾燥肉もうりふたつ。」

「ふむ。」

とリンガムは学者らしく疑問を感じたが、ヨニは涼しい顔で、

「とにかく、敵に追いつめられても、ここにいればだいじょうぶですわ。あなたがたが入ってきた岩のすきまもふさいでおいたし、まさか、岩山全体を破壊してまでわたしたちを探りだそうとはしないでしょう。」

「だいいけど……。」

陽子がつぶやいたとき、

ヨニの顔色がさっと変わった。

ふりむいた二人の眼の前に浮かんでいるのは、偵察ポッドだった。

「いかん！」

リンガムの叫びより早く、陽子の右手が稲妻のように走った。

一瞬のうちにポッドは両断され、地に落ちて炎を噴きあげた。

「ふさぐ前に入ってきたか——バレたとみていいな。」

リンガムがつぶやき、陽子はうなずいた。

「でも——この神殿の内側<sup>なか</sup>までは……。」

「いや、やつらの実力は常識の及ぶところではない。わしらの存在が明らかになれば、どのような手段を使っても襲ってこよう。」

リングムの言葉が終わらないうちに、遠くで鈍い爆発音が響きわたった。

「来たわ!」

陽子が叫ぶ。

「どうする?」

「まかせてください。」

ヨニは身をくねらせながら立ちあがった。むっと悩ましい匂いが吹きつけ、リングムはくらくらとなった。香水と混ざり合ったヨニの体臭だ。

「ここは、信徒のための休憩所にすぎません。ほんとうの神殿は別にあります。——こちらへ。」

三人が別の出入口へ向かったとき、背後でふたたび、もっと重々しい爆発音がとどろいた。

ヨニが二人を導いたのは、広い格納庫の一角であった。

さびた航空機だかロケットだかの残骸<sup>ざんがい</sup>がいくつも並んでいる。



「ここも破壊されてしまったの。でも、残った装置もあるわ。あれを背負って。」

ヨニは壁のすみに置かれたメカを指さした。

いわれたとおり身につけると、一種の飛行装置ということがわかった。

両手両足を金属の枠が包む形で、背中にバックパック型のボックス・メカを背負う。

「操縦法は簡単ですよ。発進、加速、停止——すべて頭の中で念じればいいの。メカのセンサーが脳波を読んで、そのとおり調整してくれますわ。」

「へえ、便利なものねえ。」

いきなり、左右に青い光が流れた。

壁と床が音もなく蒸発し、黒い穴をうがつ。熱線砲だった。

「急いで！」

ヨニが右手をあげると、石壁のひとつがせりあがり、長さ十メートルもある空間が口を開けた。

風と青い光が吹きこんでくる。たそがれ時だった。

「あなたはどっするの？」

装置をつけぬヨニに陽子が聞いた。

「気にしない。別の乗り物があるのよ。落ち合う場所は——。」

ヨニはいたずらっぽい笑顔を見せた。はじめて眼にする年相應の笑いだった。

「——今日の夜……でね。」

最後の言葉を聞いて、陽子は眼を丸くした。

「早く！ レダの守りがありますように！」

ヨニは身をひるがえして、格納庫の奥に消えた。

「リングム——行くわよ。」

「よっしゃ！」

二人は一気に発進口にかけより、下を見ずに身を躍おどらせた。

「飛んで。」

と念じる。

わずかな落下感もなく、身体は空中を舞った。

「うっひよう、えらい高さじゃぞ！」

陽子も眼をあけ、すぐに閉じたくなった。

二人の出てきた入り口は、地上数百メートルの山腹に口を開けていたのである。

びようびようと風が耳じ朵だを打ち、下方の平原は青いたそがれに包まれようとしていた。

「ぎゃっ！」

いきなり、リングムが悲鳴をあげた。

飛行パックが火花をあげた。

追ってきた攻撃ポッドの一撃を食ったのである。

ぐーんと高度が落ちていく。

陽子は急降下してリングムの腕をとらえた。しかし、一人用のメカはリングムの体重までは支えきれず、落下速度はゆるまったものの、地面は着実に近づいてくる。

「わ、わしをおいて逃げる、ジョシコオセエ。」

「なにをいってるのよ、つきあい悪いぞ。」

「し、しかし、いまポッドに攻撃されたら、一卷の終わりじゃ。いくらおぬしでも、熱線砲には勝てん。」

「なんとかなるわよ。」

といったものの、陽子にも自信はまるでない。どうやったら逃げだせるか、夢中で頭をめぐらした。

おかしなことに、左右を取り巻きながら、ポッドは熱線を照射してこなかった。

「なにを企んでるのかしら？」

陽子の疑問はすぐに氷解した。

下方から大質量の物体が移動する響きがとどろき、絶壁の間から、巨大な影が姿を見せたのだ。

「ヨンガリー——もうっ！　こんなときに。」

「やつめ、自分でわしらをしまつするつもりなんじゃ。だから、ポッドが攻撃してこん。い、いいから逃げろ、ジョシコオセエ！」

「誰が逃げるもんですか。短いつきあいだけど、こうなったら、死ぬも生きるもいっしょよ！」

「し、しかし——。」

陽子は必死で早く飛びたいと念じた。

しかし、メカの飛行速度には限度があるし、細工するにも、かんじんの飛行部位は背中ときている。

高度は確実に落ち、こちらを見つけたヨンガリーも、早足で移動しはじめた。

地響きが二人の身体を震わせる。

ヨンガリーのひびだらけの顔が、もうはつきりと見えた。

ぐい、と右手があがる。

「えーい！」



陽子は思いきり身体をひねった。

ぐんぐん迫る巨大な手のひらと四本の指。それが、すうつと遠ざかる。眼の前で空気が握りつぶされた。

「やった！」

と歓声をあげても、状況に変化がないのは火を見るより明らかだ。

「あーん。」

自分よりリングガムの身を案じて、泣き声をあげたとき――。

突如、天地を砕く大音響が一同の後方でとどろいた。

陽子にリングガムばかりか、ヨンガリーまでふりむくすさまじさだ。

「ああっ!？」

「なんじゃ、ま、また、化け物か!？」

二人の驚きにふさわしい光景が山腹に出現していた。

なだれおちる土砂と岩石の彼方から、ぬうと姿を現したのは、ヨンガリーにも負けぬ巨人だったのである。

ただ、むこうは石づくりなのに対して、こちらはたそがれの光さえまばゆくはねかえす鋼鉄の皮膚を有していた。

「ロ、ロボットよ！」

全員の驚きも束の間、それは堂々たる胴を二本の腕でぶったたき、三角錐の頭部からなにやら雄叫びのような声をはりあげるや、猛烈なスピードで陽子たちのほうへ走りだした。

「ま、また一台。この世界には、神も仏もないのね。わたし、不満だわ。」

「いや、ちがう。ポッドが向かっていくぞ。ありや、味方じゃ——ヨニじゃ！」

「ええっ!」

思わず陽子も振りかえった。ヨンガリーも新たな敵のほうを見つめたまま、二人を追おうとはしない。

チャンス。

陽子は思いきって急降下した。

ヨンガリーの立つ地面は広大な台地の上であり、その五十メートルほど下に平地と森が広がっている。

そこへ逃げこめば、おいそれとは見つかるまい。

後方に気配を感じ、陽子は思いきり反転しざま、剣をふるった。

追撃してきた攻撃ポッドが二個、一刀両断にされて落ちていく。

思惑どおり、深い繁みの中に身をひそめるや、陽子はリングムの飛行メカをはずし、ま

だ火と煙を噴きあげてるそれを、近くの沼にたたきこんだ。居場所を悟られない用心である。

空中を飛んでリンガムのもとへもどる。

さいわいけがはなかった。背中<sup>の</sup>毛がすこし灼けた程度である。

二人は木かげに身を潜めたまま、台地上の戦いを見守った。

巨人に群がる戦闘ポッドは、ことごとく火を噴いていた。

熱線の照射をもつとせず、巨人は頭部から重機関砲の猛打を浴びせかけたのだ。

一矢も報いぬまま、ポッドはすべて台地に屍をさらした。

「すごい、やるわね、ヨニ。」

「しっ。いよいよ、ヨンガリ——巨人どうしの一戦じゃ。」

陽子も口をつぐんだ。

風はいよいよ強く、たそがれはいっそう青さを増して、二巨人を押しつつんだ。

鉄人と石巨人——ここに相対す。

KUOOOON

ヨンガリーがほえた。

HYOOOO



鉄人も絶叫する。

どちらも同時に地をけた。

シオルダー・ブロックの形で激突する。

ヨンガリーの体重は約五万トン、鉄人は三万五千トンだが、その分はスピードが補っている。

一步もひかずにぶつかりあった。

ヨンガリーが大きく右手をふりかぶる。

それが鉄人の顔めがけて円を描きはじめた刹那、胸前にあてられていた鋼の腕も石の顔面へ直進した。

曲線より直線が早い。

鋼鉄の右ストレートを食らってヨンガリーは後退した。

すかさず鉄人の右腕が岩壁のような腹部へとぶ。

地上最大の打撃であった。

五万トンの巨体がゆらぎ、転倒した。

轟音と風はもちろん、大地にも亀裂が走る。

「わっ、やるう、ヨニ。圧勝よ！」

陽子が手をたたくのを、リングムは低い声で制した。

「いや、これからじゃ。おぬしもヨンガリーの力は知っておろう。」

「でもさ。——ああっ!？」

陽子の叫びは、ぶっ倒れたヨンガリーが、とどめとばかりに踏みおろした鉄人の足を両手で受けとめたからだだった。

一気に手を伸ばしきる。

三万五千トンのボディは軽々と宙をとんで、それでもそこはロボット、かろうじて転倒せず、片足バランスで踏みとどまった。

HYOOOO

これは驚愕きょうがくの叫びだろうか。

ヨンガリーがあわてるふうもなく立ち上がった。ふたたび、ダッシュする。

鉄人はそれを受けとめる十分な体勢になかった。

一万五千トンの体重差に加速度が加わり、鉄人はなす術すべもなく宙をとんで、数百メートル後方の岩壁に激突した。

台地がゆらぎ、表層がはがれおちる。まさに巨人の対決であった。

起きあがろうとする鉄人へヨンガリーがもう一度ぶつかった。巨体が岩へめりこむ。

おおいかぶさった茶色の身体からだがすうっと白く変わっていった。  
猛烈な熱気に岩盤が崩れていく。

ヨンガリーの熱線攻撃であった。

「だめよ、ヨニ、逃げて！」

とびだそうとする陽子を、リングムがあわててとめた。

「まだ、勝負はついとらん——あわてるな！」

その言葉が終わらぬうちに変化は生じた。

いままで耳にしたものとは異なる、はぜるような音が巨人どうしの接触面から響きわたったのである。

つぎの瞬間、もうもうたる白煙が、まるで爆発でもしたかのようにほとばしり、巨体を包みかくした。

「な、なに事よ!?」

「さすが、レダ教徒の生き残り。色気過剰でも、勘どころは押さえとるな。火に勝つものは水しかない。」

「水——!?」

いわれて陽子は、あの音の正体に思いあたった。ドジやって火にかけっぱなしのヤカン

を、水に浸してしまったときの音だ。

ヨンガリーの火炎攻撃を、ヨニの鉄人は超冷凍波で迎え討ったのだ。

はたして、石製でも痛みを感じるのか、ヨンガリーはたじたと後ろへ下がった。

ぐん、と鉄人が起きあがる。どちらも身体からだの前面は湯気でいっぱいだ。

鉄人の頭部が開き、重機関砲の発射音がとどろいた。ヨンガリーの顔面から破片がとび

ちる。二本の腕でそれをブロックしたとたん、鉄人が跳躍ちようやくした。

軽々とヨンガリーの頭上を越え、後ろバックをとる。

鉄腕が石巨人の胴体を巻いた。

なかば強引に半円を描き、一気に上体をそらせる。

陽子が驚きの声をあげた。

バックドロップの姿勢から、鉄人はヨンガリーを後方へ——台地の下へほうり投げたのである。

一瞬で陽子は悟っていた。

沼だ！

五万トンの岩塊を、ヨニは水底へ葬はうむりさろうとしているのだ。

まるでコンピュータ計算でも行ったかのごとく、ヨンガリーの巨体は脳天から沼にと

びこんできた。

噴き上げる水柱は竜巻のようであった。

「リンガム、つかまって！」

「はん!?」

「水よ！」

「わお！」

灰色の水の壁が樹木をへし折り、怒濤のごとくおし寄せてきたとき、二人はすでに空中にあった。

陽子が台地のほうを見て叫んだ。

「あつ、ヨニが降りてくる！」

「勝負はあった。頭の差じやの。おそらく、ロボットのの中にはヨニがおるんじゃない。」

凄絶な対決には不似合いな終幕だったかもしれない。

沼の中央にそびえる胴がもがきながらも、徐々に、確実に水中へと没していく姿はどことなくユーモラスで、陽子は笑いさえもらした。

しかし——台地を滑りおりてきた鉄人をひと目みて、陽子は低くうめいた。

その右腕はつけねからもぎとられ、着色コードやワイヤーやらがむきだしになっていた

のである。バックドロップを食いながらも、ヨンガリーは一矢を報いたのだ。冷たい汗が額に浮きでるのを感じながら、陽子は石巨人の最後を見守った。

もはや足首だけが空中に残り、すぐにそれも消えた。

波紋が広がり、じき静かになった。

「やったわ！」

「うむ。」

リングラムも満足気であった。

陽子は沼のほとりに着地した。突然の大水で、地面はまだぬれている。沼から押し出されたらしい奇妙な形の魚がびよんびよん跳びはねていた。

鯛に似たその一匹を、陽子は拾いあげた。

「うわ、おいしそう。今夜のおかずは決まりね。」

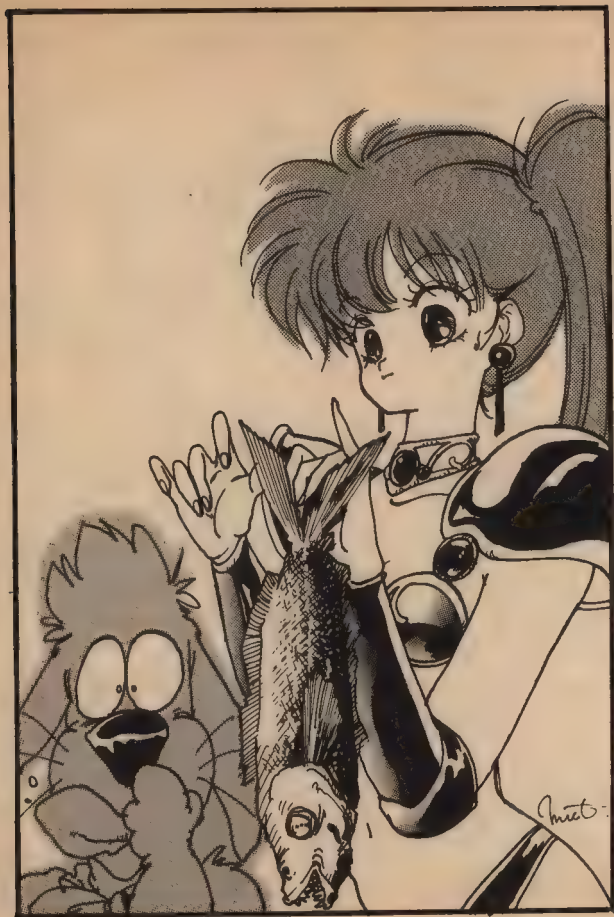
「焼くのかの？」

とリングラム。

「ううん、蒸してコキール。」

「いや、焼いたほうがうまい。ここは年長者のことをきくがいい。」

「やーよ。若いものは育ちざかりなんですからね。」



「焼かんかい。」

「蒸すの。」

そして、ふたりは顔を見合わせた。

「熱いわね。」

「うむ。」

ゆっくりと振り向いた。

白いものが眼をおおった。

沼から霧がたちのぼっている

いや、熱い。——湯気だ。

水が沸騰しているのだ！

「ヨ、ヨンガリー！」

「まだ生きておったか!？」

二人は石巨人の作戦を察知した。底しれぬ水底で全身を灼熱させ、水という水を蒸発させてからはいあがるつもりなのだ。水面は煮えたぎり、泡を吹きはじめた。

にぶい震動に陽子は振り向いた。

鉄人が沼のほとりに近づき、ひざまずいて、残った左手を水面に伸ばしたのだ。



たぎる水が静まっていった。

ヨニは冷凍波を使って、敵を封じこめようとしているのだ。

「どうなるの、いったい？」

陽子は不安げに聞いた。

「わからん。根比べじゃ。先にエネルギーの尽きたほうが敗れる。」

「ヨニ——がんばって！」

陽子にとって長い時間がすぎた。

水はたぎりもせず、冷えもせず、白い湯気だけが闇に流れていく。

水底と地上で、二人の巨人がそのエネルギーをフル稼働させ、雌雄を決しようとしているのだ。

「早くしないと、敵がまた来るわ」

陽子がつぶやいたとき、急に湯気が濃さを増した。

空中に熱気が満ちてくる。

水面はふたたびたぎりはじめた。

「ヨニ——！！」

陽子の声を絶望が彩った。

だが、その眼の前で、湧きかえる水は意外な早さで静まりかえっていった。湯気が消えぬ間に、平穏な水面に白いものが広がる。

入れかわりに、ぞくりとする冷気が陽子とリンガムの面を打った。

その水底深く石の巨人人をのんだまま、沼は分厚い氷に動きをとめたのである。バリバリと腕をひきぬく鉄人へ、陽子とリンガムは走り寄った。

胴体の一部が開き、鉄のはしごがおりてくる。

ヨニがおりてきた。

「すごいわ、見直しちゃった！」

と陽子が抱きつくのを、にっこりと押しはなして、

「軽いものですわ。」

と笑う。

「とはいっても、手強い相手。ちよっぴり疲れたし、鉄人もエネルギーを使い果たしました。神殿へ行かなくては。」

「うむ。」

リンガムもうなずいた。

黒々とおちた闇の中を、一行は目的地へ向かって前進を開始した。

巨人どうしの取っ組み合いが行われているすこし前のことである。

ゼルの実験室には苦渋が満ちていた。

レダのハートをおおった識別カバーからコントロール・ワイヤーを引き、核ヘルメットでエネルギーを受けていたゼルが、顔面蒼白<sup>そうはく</sup>となって、床に倒れたのだ。

「ゼルさま!」

かけよるチザムと護衛兵に、ゼルは首を振った。

「なぜだ……なぜ、コントロールできん? レダへの想いが足りないのか……?」

「わかりません。」とチザムは蚊<sup>か</sup>の鳴くような声でいった。

「ですが、あのような音声パターンはアシャンティに存在せぬものです。それを理解する行為自体に無理が——やはり、生身の人間に、レダのパワーはコントロールできないのは……。」

チザムの言葉は、同時に問題の解答でもあった。ゼルの眼<sup>め</sup>がただならぬ妖光を発した。

「生身の人間には不可能、となると、レダの戦士しかおるまいな。つまり、あの娘だ。」

「はは。」

「方針を変更する。なんとか生かして、わたしのもとへ引きつけてこい。レダ・パワーを

操るために利用してくれる。」

「利用——と申しますと？」

「奪うのだ。レダの戦士ハイトの心をな。」

● 第 7 章 魔獸壊滅

陽子たちは、前にもまして超広大な地下神殿の一部にいた。

「へえ、凄<sup>すご</sup>いわね。でも、ここが破壊された遺跡のすぐ下にあるなんて、セルも気がつかないでしょうね。」

きよろきよろしながら周囲を見まわす陽子に、ヨニはにっこりと、

「下といっても、四方の岩壁は五十メートルの厚さがあるし、めったなことでは破れやしないわ。——ガルバの総攻撃でも食わないかぎりは。」

「ガルバ!？」

リングムのただならぬ声が陽子を不安にさせた。

「なによ、それ、別の怪物?」

「いや——。」

といいよどみ、リングムはヨニのほうへ眼をやった。ヨニもちよつと困ったように口をつぐむ。二人の様子を見て、陽子もそれ以上は追求しなかったが、その単語の表すものが、自分たちにとって危険な存在だということはひしひしと感じられた。

唐突に、怒りにも似た哀しみが胸に渦巻き、陽子のかたわらのいすに腰をおろした。固く閉じたまぶたから涙があふれかかるのを必死でこらえる。

父さん——会いたい。

母さん——会いたい。

そして——。

あなたに——会いたい……。

夕焼けの下を白いサツカーボールが走っていた。

激しい呼吸音と足音がそれを追う。

汗にまみれたジャージ。トランクスからのぞくたくましい陽灼けした太もも。厚い胸。

あの人のために作った曲。

ただ、それだけなのに……。

そつと肩に白い手が置かれた。

「哀しまないで、陽子。」

ヨニがやさしくいった。

「頼らないけど、わたしたちがついてるじゃないの。だいじょうぶ、きっと、レダのハートを取りもどして、もとの世界へ帰れるわよ。」

「そうじゃ。」

とリンガムも陽子の足元でうなずいた。

「わしとヨニ、ふたりして、なにがなんでもおぬしをノアの世界へ帰してみせるわ。安心

せい。」

「うん。」

陽子も元気よくうなずいた。

ほんとうの友だちは一生にひとりいればいいというが、この世界で、陽子はもうふたりも見つけたようだ。

「すこしお休みなさい。眼がさめたら、すばらしいプレゼントを見せてあげる。レダがあなたへ遺したもののよ。」

ヨニの笑みがまぶたいっぱいに広がった。

「ねえ、あなた、陽子、まだ帰らないんですのよ。いちおう、私立探偵でも頼みましょうか？」

妻の言葉に、原稿用紙に向かっていた夫は顔も上げずにいった。

「私立探偵でも警察でもいいが、わたしに知らせるのはあと五十枚書いてからにしてくださいか。」

「ま、冷たい方。」

憤然とした妻は、右手の指にピンクのマニキュアを塗りながら書斎を出ていった。



信者用らしいふかふかの寝台で眼をさますと、リングムの笑顔が眼の前にあった。

「ほう、よく眠れたらしいの。もう、昼近いぞ。」

「ほんと？」

陽子は眼をこすりながら、白い光のみなぎる空間を見わたした。

「ね、ヨニが見せてくれるといったすばらしいプレゼントってなにかしら？」

「こっちよ。早くいらっしゃい。寝ぼすけ。」

ばかりかい石扉の前でヨニが微笑んでいた。

毛布をひるがえし、陽子は床を走った。

リングムも後を追う。

扉の向こうは廊下だった。

どこを向いてもすきまひとつない岩壁ばかりなのに、明らかに陽光とおぼしい光が四方からさしこんでくる。陽子には想像もできない仕掛けだった。

「不思議？」

心の中を見すかしたようにヨニが聞いた。

「え、ええ。」

「まだ驚くことがありますのよ。これに乗って。」

足元を見て、陽子は眉まゆをひそめた。

幅二メートルほどの水路が何本も続いている。

「乗れって……？」

「乗るのです。こういうふうに。」

ひよいとヨニは水の帯に足をのせた。沈みもしない。陽子をはじめて、床にうがたれた穴に水がたまっているのではなく、床上に盛りあがっていることを知った。にこにこしてゐるヨニに続いて乗る。思ったより固い水面だった。

リングムが乗ったのを見届け、ヨニは軽く手をたたいた。

「あっ！」

陽子は低い叫びで驚きを中和した。

床が、いや床上の水が、三人を乗せたまま走りだしたのである。なんと、自走路オート・ロードだったのだ。

新宿駅と小田急ハルクを結ぶ通路に設置されてるのに乗ったことがあるが、スピードもスケールも比べものにならない。それに、この安定感。耳もとで風が鳴るのに、引っぱられる感覚がゼロなのだ。

「一種の流動体。一定方向の力に応じて自力移動するのです。昔は、一度に数百万人のレダ教徒を運んだといわれています。」

「へえ。——すごかったのね。」

「みんな、昔のことですけれどね……。」

ヨニが哀しそうに眼を伏せた。夕べ、陽子とリンガムに、亡くなった父母から最盛時のレダ教の話を聞かされて育ったと話した。レダへの崇拜は、この少女の胸にしっかりと根をおろしている。それだけに、往時の面影をとどめるものを利用すれば、万感胸に迫るのだらう。

走る水は床ばかりか壁面までも走った。

重力場さえ変更させるのか、方向感覚にはまるで狂いがなく、陽子は息をのむばかりだった。

前方に絶壁が迫る。水は停まらない。

「ちよっと、ヨニ——!?」

声が終わるまえに岩肌が広がった。

きゃあ、と叫んだとたん、岩壁はものすごい勢いで左右に開き、三人はこれまでと桁<sup>けた</sup>ちがいに広い部屋へ運びこまれていた。

壁と天井には、ナスカの地上絵を思わせる図柄が詳細に彫りこまれ、部屋の中央に、石造りの台座がひとつ置かれている。——それだけだ。後はなにもない。殺風景どころか、荒野を思わせる部屋であった。

「なによ、ここ？——愛想のない部屋ね。」

不可思議な気配を感じながら陽子はつぶやいた。ヨニは明るく——。

「レダの翼の間ですわ。」

「レダの翼？——なによ、それ？」

「わからない。昔から、この部屋だけは、レダ教徒の謎なのです。入っていいのは、最高神官だけ。でも、あのゼルでさえ、ここの謎を解くことはできなかったのです。ただ——。」

「ただ？」

ヨニの頭から？マークが幾つもとびだしたようであった。

「レダの戦士が、ここに座するとき、その謎は解き明かされるとか。」

「ほう。」

リンガムは感心し、陽子は首をひねった。

「ここにすわるって——すわってどうすればいいのよ？」

「わかりません。ね、ちよこっとすわってみませんか？」

「でもオ。」

疑い深そうな表情で陽子は首を振った。

「でも、ね、すこしだけ。」

ヨニがおもしろがって勧める。

「そうじゃ、そうじゃ。」

とリンガムも加勢した。こうまでのせられて、黙っていられる陽子ではない。

「ほんじゃ、ちよっぴりね。——ひとすわり。」

「けっこう！」

リンガムが手をたたいた。なにやら、いかがわしいショーの踊り子と客という気がしないでもない。

それでも少々おっかなびっくり、陽子は石の席にのぼった。思いきって腰をおろす。なにも起こらない。

「なーんだ。ただの固い椅子——。」

子<sup>す</sup>といいかけたとき、空気がぴーんと鳴った。

ヨニとリンガムの驚きの叫びをけちらして、石の台座は猛スピードで部屋のはしまで移動した。

「こ、これはいったい——!?」

リングラムがぴよんとヨニのおしりにくつつく。巫女みこは怒るのも忘れて眼前の「変身」を見守った。その口から低く低く、レダの祈りが洩れる。

「レダの戦士きん来りて、ここに座するとき、力の門は開かれ、レダの翼は天空へはばたく……。」

「レダの翼？」

「わかります——いまに。」

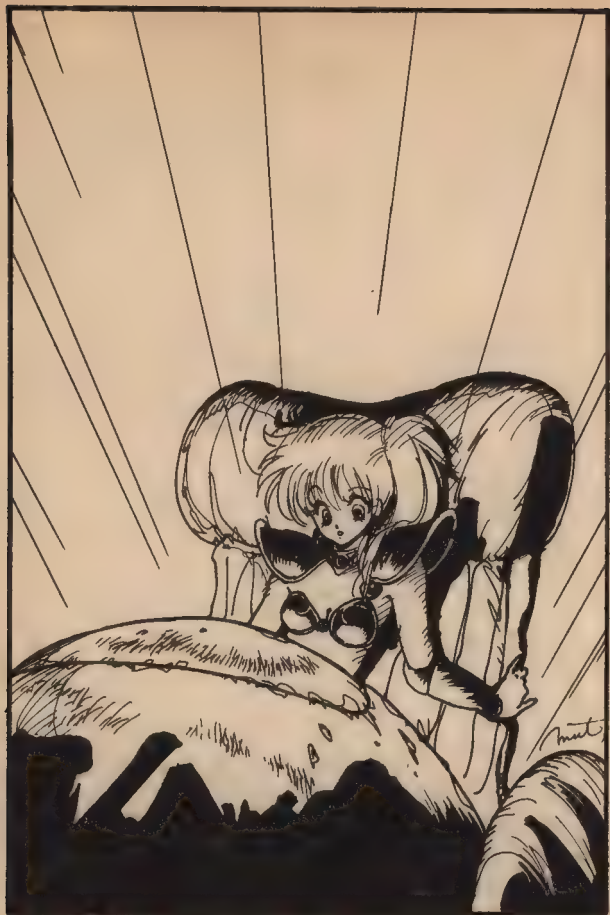
床から銀色の光の帯が空中へ走り、つぎの瞬間、無数の細い線に分かれて台座の前後をとり囲んだ。三人を運んできたあの流動体である。

それは奇妙に、骨格のような形をつくると、するどい先端を石床にめりこませた。岩石などものともせず、四方へ走り、様々な大きさの溝を、というより、四角形をえぐった。それがぐいと床から持ちあがったのである。下方からかがやく流動体の触手に支えられて。

そして、岩塊は、まるで鋭利なナイフで切りぬかれたチーズのような切断面をみせて、台座の前後に固定された。

「い……。」

リングラムがつぶやく間に、岩塊はすさまじい白光に包まれ、溶け崩れ、まるで溶解した



鉄骨のような惨状をさらした。

「……いっ……。」

流動体から別の細い触手が伸び、ゆがんだ岩塊をたたき、引き伸ばし、おのおの異なる形をとらせはじめた。

「……いっ……。」

まず、巨大な翼ができた。さらに、エンジンが、姿勢制御装置が、その他のメカが作られ、つぎつぎに組み合わされていった。装甲板がその上をおおう。

すべては、まばたきする短時間の出来事であった。

「壁の——鳥の絵が光っておるぞ。」

茫然と立ちすくむリングラムにヨニがささやいた。

「翼が——レダの翼ができあがったのです……わたしたち、材料の切り出しから完成までの全過程を目撃したのですわ。」

内部には冷却装置も備わっているのか、すさまじい熱気を放散する機体はたちまち色を失い、たちのぼる陽炎もかき消えると、「レダの翼」は、その真の姿を二人の前に現していった。

全長は約十五メートル。



いつのまにか、レダのかけた台座前面を風防ガラスがおおい、その姿はまこと優美な鳥のものであった。

陽子もきよんとしていた。

ほんの一、二度、まばたきする間に、なにもない空間が鋼鉄の壁で囲まれ、超近代的なコクピットが誕生していたのである。

しかも、その機能すべてが陽子には理解できた。

コクピットにはいっさいの計器がない。一本のハンドルがあるだけだ。それに触れて念じれば、この巨鳥はレダの戦士の命令を読みとって自在に動くのであった。ヨニがよこしてくれた飛行メカ同様に。

「すごい——感じるわ、この乗り物のエネルギー量——ほとんど無限大よ。」

巨大な飛行装置——レダの翼の内と外で、三人は自信と力が全身に満ちるのを感じた。そのとき——

頭上でにぶい爆発音がとどろき、細い岩の断片が落ちてきた。

ヨニとリンガムがはっとふりあおぐ。

「敵じゃな。——ゼルを甘く見過ぎた。おそらく、我々がまだこの近くにいと踏んで、地底探査メカでも派遣したのじやろう。」

「いよいよ、決戦ですね。レダの翼が誕生したとき、この神殿に敵がくるとは、これも運命ですわ。」

二人は眼と眼を見交わし、二手に分かれた。リングムは飛行メカに、ヨニは走路に乗って鉄人のもとへ。

天井に亀裂が走るや、先端にドリルをつけたモグラ状のメカがとびだしてきた。

レダの翼めがけていっせいに体当たりをかます。

すでに乗りこんでいたリングムが思わず頭をおさえるほどのすさまじさだ。

しかし、大質量の岩壁を貫いてきた特殊鋼ドリルも、レダの翼の装甲の前には無力だった。先端がひしゃげ、滑り落ちるものまで出る。

「えーい、虫ケラめ。——ジョシコオセエ、なんとかすべきじゃぞ。」  
「まかしとき。」

ハンドルに手をあて陽子は念じた。もっと戦いやすい形になれと。

それは一瞬の出来事であった。

翼がおりたたまれ、胴体から別のメカ——二本の足がせりだし、飛行より歩行にふさわしい形をとっていく。

二本の腕がうなり、地底メカはたちまち撃墜されてしまった。

一方、地上ではヨニが、襲ってくる戦闘ポッドを迎え討っていた。地上戦オンリーの鉄人は、遠方から攻撃するポッドに対して不利だが、乱射する重機関砲と冷凍波の威力は十分で、ポッドはみるみる数を減じていった。鉄人の装甲はレーザー・ビームをもはねかえし、ミサイルは爆発する前に冷凍波を浴びて氷塊と化してしまうのだ。

「どんなものです。いくらでも、かかってらっしゃい。」

頭部内のコクピットで、ヨニは色っぽい笑みを浮かべた。

それが凍りついた。

頭上から、レーダーの死角をついて、なにやら黒い巨影が躍りかかったとみるや、二本の足で鉄人の両肩をガッキと押さえつけたのである。

猛烈な勢いで羽ばたくそれはロダンであった。

三万五千トンの巨体はあつというまに空中に浮いた。

風を去って上昇する。

ものすごいスピードだ。

ヨニは冷凍波を放った。

マイナス二七二・八度。

空気すら凍りつき、白雪と化す。

そこをぶちぬいてロダンが上昇する。

砕けちる空気の細片が陽光を反射して宝石のようにきらめいた。

ロダンはしかし、凍りつかなかった。

全身をおおう羽毛の一本一本が超振動を誘い、冷凍波を反射してしまうのだ。

高度はまもなく二千メートルに達しようとしていた。

陽子のロボットは通路を駈けていた。

「ヨニは無事かしら？」

「だいいいの。」

レダの戦士の接近を感知してか、行きどまりの壁が開く。

「フォーム・チェンジ！」

陽子がカッコよくいい放ち、おかしなポーズをつけた。

「なんじゃ、それは？」

「ノアでいま流行<sup>はや</sup>ってるの。でっかいものの形が変わるときは、こう叫んで、こんなカッ

コすんのよ。」

「へえ。」

入り口をとびだしたとき、ロボットは飛行メカに変わっていた。

「ウイング変身。」

「ほう、そういう名前か、これは？」

「ちやうわ。いま考えたの。」

「なんじやい」

リンガムは大きく伸びをしてみせた。

「あーっ!？」

「またか——今度はなんの変身じゃ？」

「ちがうわ——ヨニがやられてる!？」

「ん——!？」

コクピットの前方を上昇していくのは、まさしくロゲンとヨニの鉄人であった。

「いかん。いくらヨニでも、あの高さから落とされては、もたんぞ。」

「待ってて、ヨニ。——いま、行くわよ!」

全力疾走!

陽子よ、急げ。

だが、超加速に移る寸前、ひとつにつながっていた影は、ふわりと分離した。

「ヨニ!!」

急降下に移る陽子の前に、ロダンが立ちふさがる。

「えい、このう！」

ウイングの翼からほとばしるレーザーを、ロダンの超震動が分解する。

一匹と一機は空気をぶちぎりつつ交差した。

すれちがいざま、ロダンの腹部から平べったい金属片がとびちり、ウイングにへばりついた。

間髪入れず、機体を青白い閃光せんこうがつつむ。電撃攻撃だ。

「平っちゃらよ、こんなもん！」

つぎの刹那せつな、機体は灼熱しやくねつした。二百万度の超高熱が表面に発生したのだ。

「なによ、このピラピラ!？」

さすがに薄気味悪くなったのか、急降下しながら陽子が叫んだ。

「アタック・チップじゃ。ロダンの腹の中で作った超LSIに、攻撃機能が組みこまれておる！」

「LSI!？」

陽子は仰天した。

「どうして、そんな単語、知ってるの!？」

「はてな？」

「ヨニイ！」

まにあわなかった。

大地の一角に火の花がさき、たちまち赤い花卉を広げていく。

と、炎の中から一台の小型ポッドが躍り出て、上昇を開始したではないか。

コクピットの中で手を振るのは——ヨニだ。

「無事だったのね!!」

陽子の眼に安堵の涙が光った。

「いくわよ、化け物——決着をつけてあげる。」

機体の表面では、あいかわらずアタック・チップが冷凍攻撃をかけていたが、陽子は気にもとめなかった。

彼方で羽ばたくロタンへ突進する。

「チップを破壊する手段は？」

念じたとたん、回答が頭の中に響いた。ウイングのテレパシク・コンピューターの声である。

「爆破指令の入力。こちらから操作可能。」

「それよ。ロダンをつかまえたら、そうして。」

「了解。」

「どうする気じゃ？」

リングラムが不安気に聞いた。

「まあ、見てなさい。」

ロダンは眼前に迫っていた。

陽子はわざとスピードをおとした。

巨鳥が体をかわし、二本足でウイングの背をつかんだ。

ぱくりと腹部が割れ、ほかほかの原子破壊弾を植えつけようとする。

「アーマー・チェンジ！」

陽子の叫びと同時に、ウイングはロボット——アーマーに変わり、その豪腕がぴたりとロダンの足をおさえた。

チップの爆発はロダンが体内に抱えていた原子破壊弾をも誘爆させた。

たまるはずがない。

天地をゆるがす大音響と十億度に達する炎の中で、さしもの怪鳥も悲鳴ひとつあげえず、分解してしまった。



mit:



しかし、アーマーは傷ひとつ受けない。

「やったぞい！」

リンガムは大喜びだ。

はるか彼方に滞空してるポッドの中で、ヨニも同じ笑みを浮かべているだろう。

陽光をはねかえしつつ、アーマーはウイングに変じた。

「さて——つぎはいよいよ、セルとの対決じゃな。」

陽子は無言でうなずいた。

「でも——どこに行けば？」

疑問を解くのに長い時間は必要とされなかった。

並んだ二機が、大きく揺らいだのである。

眼をむく陽子の頭に、コンピュータの思考が鳴りわたった。

「上空二千メートルに重力場変動あり。大質量接近中。」

不吉な予感が背筋を走り、陽子は思わず上空を見上げた。

最初、それは小さな点としか見えなかった。

そして、一秒とかからぬうちに、想像を絶する巨大な建造物と化して、陽子の視界を埋めつくしたのである。

全体像は駒に近い。

高さ十キロの鋼鉄の駒に。

その表面にそびえる様々な建造物、砲塔、ミサイル発射台、巨大な発着孔からのぞくおびただしい戦闘機、ポッドの群れ、その周囲をとりまく無数の見張り塔と空中砲台。

重力場飛行を続けるためのあおりを食って、陽子は何度かウイングの体勢をたてなおさねばならなかった。

「これは……ついにできたか——浮遊城ガルバ。」

リングムの声は遠く流れた。



●第8章 内なる死闘

リンガムの声は遠かった。

「ガルバってなによ？」

「アシャンティにおけるレダ・パワーの源じゃ。といっても、完全なものではないがな。それでも、この世界では最強の力を持つておる。……もとは、やはり、レダ教の神殿だったのじゃよ。」

「それをゼルが盗んだのね。」

「そうじゃ。」

「でも、どうして、攻撃してこないの？」

「わからん。」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず——入ってみるか。」

「そうするしかないようじゃな。」

リンガムはくらい決意をひめてうなずいた。

隣のヨニに中へ入ると合図し、陽子は手近な発着孔のひとつへ向かった。ヨニのポッドも後に続く。

広いという形容も恥ずかしくなるくらいスペースは、陽子が写真で見た航空母艦くらいもある巨大な飛行メカやポッドで埋め尽されていた。こんなものが、ノアの世界へ現れ

たら……。

陽子にはじむ汗をぬぐった。

ウイングをアーマーにチェンジさせ、着陸する。

鬼が出るか、蛇が出るか。

出たのは、小さなロボットであった。

無数のドアのひとつから、スマートな車に乗って近づいてきた。

「ようこそガルバへ。主人がお待ちかねでございます。」

よく通る声で呼びかけた。見かけはかわいらしいが、ゼルの配下にはちがいない。油断は禁物だ。

「食事の仕度もできております。さ、わたくしについてどうぞ。」  
いうだけいって背を向けた。

陽子とリンガム、ヨニはコクピット内で顔を見合わせ、動かない。

「あのう、来ていただかないと、わたくし、困るんですが……。」

ロボットが振りかえり、情けなさそうな声でいった。

「役目をしくじると、分解されてしまいます。」

「ねえ、ちよっと、かわいいそうよ。」

と陽子が洗ひ顔のリングラムをこづいた。

「ここにいても、どうしようもないし、ゼルを探す手間が省けていいんじゃない？ いざとなったらアーマーもいることだし。」

「ふむ、そうじゃの。」

手まねで「行く」と合図すると、ヨニもうなずいた。

喜々として先導するロボットについて、一行は巨大な城塞の内部へ足を踏み入れた。

まるで都市——いや、国だ。

廊下の外部には何百層と続く建物がそびえ、高架道路が音もなく疾走している。建物の周囲をめぐるのは、予備の原子炉や発電所を包含した人工衛星にちがいない。

やがて、三人は巨大な広間に足を踏み入れた。

中央に色とりどりの珍味を山盛りにした大テーブル。

そして、着席したひとりの男。

ゼル。

あいつだわ。

陽子の眼が光った。

ゼルもじっと見上げる。



コクピットの風防ガラスを介し、いま、宿命のふたりはここに相まみえた。

「ようこそ。招待を受けていただいて光栄だ。——さ、席へつきたまえ。」

ゼルは顔にふさわしい優美な声でいった。

「いかん、外へ出たら、やつの思うつぼじゃ。」

「でも、いきなり攻撃するわけにはいかないわ。それに、いつかは二人だけで決着をつけなくちゃ。リングムはここに残って。」

「わかった——気をつけてな。」

陽子にはっこり笑って、リングムの頬ほおに口づけした。

「ジョジョオセエ。」

哀しげな声にも振りかえらず、コクピットを出た。

歩み寄る陽子を、ゼルはこの世ならぬ微笑で迎えた。

「断つときますけど、おかしな真似をしたら、リングムがアーマーを動かすわよ。」

「わかつているよ。」

ゼルは微笑を崩さずいった。

「そう怖い顔をせずとも、おたがい、レダの力の秘密を知ったものどうし。もっと歩み寄れるのではないかね？」

ふと、陽子の胸に、不可思議な想いが湧いた。

似ている。ゼルの顔——誰かに似ている。

いや、ちがう。顔ではない。なんというか、イメージが……。

「わたしの顔になにかついているかね？」

聞かれて陽子はなぜか赤くなった。

どうして!? その想いに陽子は怯えた。

憎んでも憎みきれない男なのに、わたしは、こいつを憎んでない!

ずっと美貌がそばへ寄ってきた。

美しい唇が迫る。

思わず眼を閉じかかり、陽子は自分の心をはたくように手を振った。

音は弱かった。

「これは、ごあいさつだな。」

ゼルは頬に手をあてようともしせず笑った。

「ゼルさん、わたしのテープ……いえ、レダのハートを返してください。」

陽子是可以るだけ力強い声でいった。

「そうだったね。もちろん返すとも。ほら、ここにある。」



テーブルに置かれたヘッドホン・ステレオが、陽子の思考を奪い去った。これで帰れる。その想いだけが、彼女をゼルのもとへ走らせた。

「行っちゃだめ！」

ヨニが叫んだが遅かった。

陽子とヨニとの間に、霧のような膜がおりたのである。

「障壁バリヤだわ！」

陽子もそれに気づいて剣をぬきはなった。

「そう、あわてるな。戦いはいつでもできる。」

ゼルは黄金のカップからワインをのどに流しこみながらいった。

「……君はなぜ、ここへ来た？」

意外な質問に陽子とはまどった。

「なぜって——あなたが引きずりこんだんじゃないの。レダのハートを狙って。」

「ふむ。すこしちがうな。——だが、まあ、いい。それでは、なぜ、レダのハートが君の手にあったのだね？」

「それは……。」

「エネルギーは、この世界にはない音声パターンのくりかえしに秘められていた。それは

君が作ったものではないのか？」

「……………」

「そうか、凶星だな。——。偶然すぎるとは思わんか？」

「なにが——よ？」

「君はなぜ、戦士に選ばれた？」

「……………」

「わたしはなぜ、ノアの世界へ侵略を企たくらんでいるのかね？ アシヤンティは、これでまだ実り豊かな土地なのだよ。」

「それは、あなたが悪党だからじゃないの!!」

「それもそうだ。」

ゼルはにやりと笑った。

「だからこそ、君をこの世界へ引きずりこんだのだ。だがね、わたしは単に手を貸したにすぎん。君は、この世界へ来ることを、自ら望んでいたのだよ。」

「なんですって——うそよ！」

逆上して叫びながら、陽子は心の底に広がる驚愕きょうがくを感じていた。

ゼルのいうとおりなのだ。

「君は、あの世界——ノアから逃避したかった。あの世界にいるのに耐えられぬくらい傷ついていた。どこかへ逃げたかった。わたしはそれに力を貸しただけだ。」

「そうかもしれないわ。いえ、きっと、そう。」

すなおに認め、しかし、陽子はきつと顔を上げた。

「でも、いまのわたしはちがう。向こうの世界へもどって、納得の行く生き方をしたいし、あなたをこのままほうつてもおかないわ。」

「ほう、どうする気だね？」

「それは……。」

「まあ、よい。じき、この城はノアへ向かって次元の道をたどりだす。君は黙って我々についてくればいい。」

陽子の視界に青い光が広がりはじめていた。それは、ゼルの額の宝石の放つかがやきであつた。

「レダの戦士はレダそのものではない。その肉体はわたしと変わらぬ生身のもの。愛し合うことだってできるはずだよ。愛し合うことだって……。」

青い光は陽子の脳細胞まで満たしていた。

ひとつの若々しい顔が浮かんだ。

陽子は声もたてず、床に倒れていた。

「くく……他愛もない。これがレダの戦士か。」

ゼルは背後を振り向き、うなずいた。

みるみる床がかたむき、食卓は反転し、天井から無数のメカがせりだす。

あつという間に、広間は実験室と化した。

「こら——陽子になにをした!？」

リンガムの叫びを重機関砲の轟音ごうおんがかき消した。ヨニが放ったのである。

しかし、弾丸は空しく、霧のごときバリヤーにはねかえされ、地に墜おちた。

ヨニとリンガムの全身を強烈な電撃が流れ、二人は昏倒こんとうした。バリヤー自体が帯電し、

ポッドとアーマーを直撃したのである。レダのアーマーも、戦士たる陽子を失えば、ただのメカにすぎないのだ。

「そいつらは解剖台にしばりつけろ。」

ゼルは冷たく命じた。

「さんざんじゃまだでした憎いやつ。生きたまま、生体解剖にかけてくれる。レダの戦士の心がわたしのものになるのを目のあたり\*にしなから、じわじわとな。」

そして、いつのまにか無数のケーブルに巻かれて宙に浮いた陽子を見上げ、こうつぶやいたのである。

「どんな楽しい夢を見ておることか……うらやましい。」

打ち寄せる波の果てに、燃える陽が沈もうとしていた。

ぼんやり見つめる顔の前へ、ひよい、とコーラのびんが差し出された。

青年の顔が微笑んでいた。

「ありがとう。」

陽子は礼をいった。

「なにを考えてるの？」

優しくたくましい声が聞く。

「なにも。——まるで、すべてが夢のようだって。」

「おかしいことをいうね。ぼくたちはちゃんとここにいるのに——ほら。」

青年の手が白い肩にふれる。陽子はワンピースの水着、青年は海水パンツ一枚。海辺にふさわしい光景だ。

二人きりの渚。なみさ



陽子が望んだはずの光景。

それなのに、どこかおかしい。

「どうしたの？」

青年がまた聞いた。

「なんでも——いえ、どこかおかしい。わたしたち、たしかにここにいるのに、ちっとも現実感がないの。いいえ、ある音がないわ。」

「そんな——ほら、こうしても？」

熱い肌が重なり、陽子は砂地に押し倒されていた。眼の前に憧れの顔。熱い息が顔じゅうをはう。

「好きだよ……陽子。」

「あたしも……。」

唇が重なった。

波の音が絶えた。

陽子は眼を開いた。

向こうに実験室が見えた。

驚きが陽子の意識を奪った。

「おかしい。」

ゼルの苦顔にチザムが眉をよせた。

「ゼルさま、どうなさいました？」

「あの娘にレタの音声パターンを聞かせ、肉体を通して、そのエネルギーをガルバに注ぎこむ——これには、娘がすべてを受け入れる精神状態でなくてはならん。わたしはそうしたはずだ。それなのに、娘の心に乱れがある。」

「しかし……。」

「えい、かまわん。続けるぞ。」

「はっ。」

メカ類の点滅はやむことなく続いた。陽子のすぐそばではヘッドホン・ステレオがあのかを奏でている。

陽子は薄日のさす教室にいた。

窓辺に腰をおろし、巧みに編み棒を操り、青いセーターを編んでいる。もちろん、彼のためだ。

教室のドアを開け、汗の匂いといっしょに彼が入ってくる。黄色いサッカーのユニホームも白いトランクスも、茶色に汚れている。

「やあ、お待たせ——できた？」

「もうすこし。」

陽子は微笑した。

それが騒さわった。

「どうしたの？」

「なんだか、おかしい。」

「え？」

青年の顔がゆがんだように見えた。

「わたし、どうして、こんなところで編み物してるんだろう？」

「どうしてって、ぼくが頼んだのさ。ベストを編んでくれて。」

陽子は眼めをおとした。たしかにベストだ。でも、さっきまで編んでいたのは……。

「おかしいわ。」

「だから、なにがさ？」

青年は隣にすわった。

そつと手をまわし、肩を抱く。

「おかしいのは君さ。ぼくらは、ちゃんと、ここにいるじゃないか。」

「音がないわ。なんだかわからないけど、なにかの音が聞こえないの。」

「なにをいうんだ。ぼくらには最初から音楽なんか必要なんだ。」

「ちがう——おかしい。わたし、わたし、編み物ができないのよ。」

「え？」

「見て。」

いきなり陽子は編み棒を逆手に持ちかえ、反対側の手に突き刺した。あっけなく貫き、しかし、血は一滴もでなかった。

青年は茫然と立ちあがった。

「なにもかも嘘よ、でたらめよ。あなたは——あなたはいつたい、誰なの!？」  
心の底から湧きでる力にのせて、陽子は絶叫した。

ケールが火を吐いた。

断末魔の蛇のようにうねくり、室内を駆けめぐる。

「ぎゃっ！」

直撃を受けたチザムが、一本しかない髪を直立させてひっくりかえった。

「な、なぜだ。なぜ、わたしの力が。この娘——アシャンティへ来たときより強くなっておる。」

反応炉のひとつが火を噴いた。

陽子の全身から噴き出す「否定」のエネルギーが、ゼルのメカの許容量をはるかに上まわっているのだ。

陽子が空中からとびおりた。

床に落ちた剣を拾うや、手術台にしばらくつけられたヨニとリンガムを解放する。

「陽子——無事じゃったか!? 早く逃げんと浮遊城が吹つとぶぞ。」

リンガムの説明に答えず、陽子はゼルに向かっていった。

「お行きなさい、ゼル。あなたの正体がようやくわかったわ。」

「わたしの正体？」

「そう。わたしにとって、とても懐かしい人。どうして、そうなったのかは知らないけれど。わたし、あなたと戦いたくはないわ。」

「そうはいかん。」

ゼルの瞳は憎悪に燃えていた。

「すべては崩壊する。おまえひとりのために。その生命でつぐなってもらおう。」

ゼルは突進した。

ケープが風を切り、その奥から小さな無数の頭がのぞく。

「殺人虫じゃ。刺されたらイチコロじゃぞ！」

リンガムが叫んだ。

蛙、ヒル、蛇、毒蜘蛛——毒々しい原色の生き物たちがそれぞれ自体ケープのように陽子を襲った。

全身にそれらまといつかせて、しかし、陽子はビクとしなかった。汚らしい生き物など、心の戦いに比べればなにほどのこともない。

ゼルの顔に動揺の色が走り、右手が長剣にかかる。

横なぎに走った刃を高く跳びかわし、陽子は思いきり長剣を突き出した。

ゼルの額に銀の角が生えたようであった。レダの戦士の刃は、彼の宝石を貫いていたのである。

よろめく頭上へ、電光に彩られた巨大メカが落ちてきた。

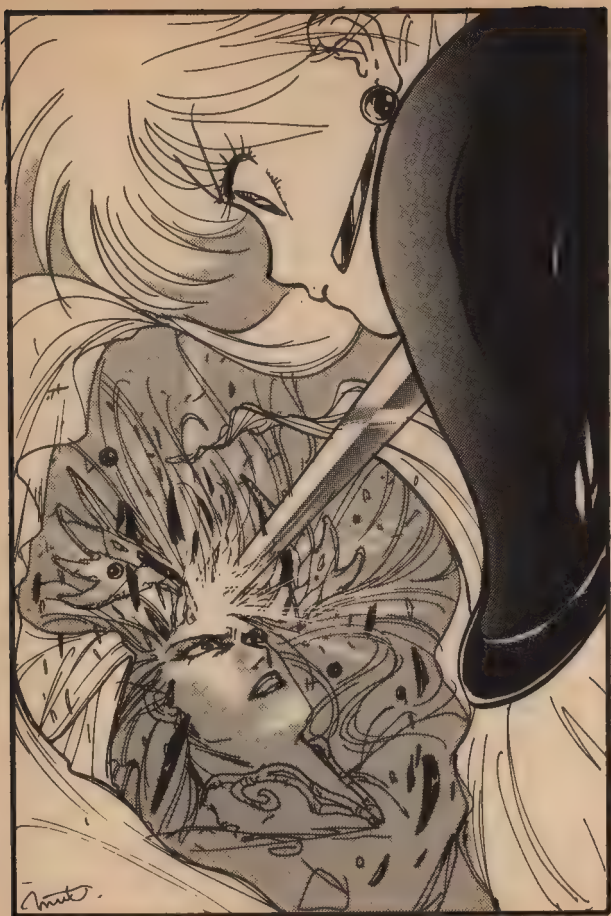
「逃げるぞ！」

リンガムが陽子の手を引いた。ごていねいにも反対側の手にヘッドホン・ステレオ。

ヨニはすでにポッドに入っている。

陽子とリンガムもアーマーに走った。

数分後、百キロほど離れた空中で見守る三人の眼の前で、浮遊城ガルバは碎け散った。



「やったわね。」

陽子がつぶやいた。

「ああ。」

リングムがうなずく。

三人は、手近な森の一角へ着陸した。

もう話すこともない。

陽子は二人に別れを告げ、ヘッドホン・ステレオを耳にあてた。

「元気だね。」

ヨニが寂しそうにいった。

「また会える日を楽しみにしておるぞ。」

リングムの声だけが明るい。

「ええ。——きつと、また会えるわ。」

つかの間の滞在だったこの世界に、いまは別れがたいものを感じながら陽子はうなずいた。

「さよなら……またね。」



音楽とともに、白い光が全身を包んだ。

そして……。

陽子は、あのれんがの道に立っていた。

ふりむいた。

ぎよつとしたような表情の女の子が二人立ち去っていくばかりで、ほかに人影はない。

時間だけはアシャンティにいるときと同様、経過しているらしい。

すべてが夢のようであった。

陽子は家にもどり、手ぐすねひいて待ちかまえていた両親の——質問責めにあった。

どんな男としけこんだのかにはじまり、どのホテルを使い、料金はいくらで、どんな夜を過ごしたか——よだれを流さんばかりの勢いだった。好奇心の塊である。だいじょうぶだったかの一言もない。

「嫌い、もう！」

陽子は憤然と居間を出て、父の書斎へ入った。

腹立ちまぎれに原稿を燃やしてやるつもりだった。

テーブルの上に、厚い束がのっている。

「しめしめ、よく燃えそっだ。」

父の卓上ライターをつかんで、ひよいと眼をおとすと、タイトルが眼に吸いついた。

「SF巨編・幻夢戦記レダ」

「レ、レダあ——!?」

放火への情熱も忘れ、陽子は貪るように原稿を読みはじめた。

物語は、恵子と名乗るひとりの少女が、アシャンティという別世界へ吸いこまれ、レダのハートをめぐって強大な敵と戦う。敵の名はゼル。味方はリングムとヨニ……。

ストーリーは、陽子の体験そのままであった。

そうだったのか……。

けだるい疲労を全身に感じながら、陽子は夕映えに染まる書齋に立ちつくした。

これで、わかった。

リングムとヨニが、都合よく日本語をしゃべれた理由。

あのカップ・ラーメンをはじめとする、アシャンティとこちらの世界の類似点。

はじめてSFを書いた純文学作家の世界……。

いつ、どうやって自分は父のものとした世界に入りこんだのか？

恵子ではなく、陽子として。

やはり、あの男に傷つけられるのが怖くって、それで……。

そうやって、ゼルにあの男の面影を見ていたのだろうか。憎しみさえこめて。

でも、もう、すべては終わったのだ。

陽子は手にした原稿を机上にもどし、書齋を出た。

すこししてわめき騒ぐ父の声が家じゅうにとどろいた。

「なんじゃ、なんじゃ、母さん。陽子のやつ、いきなりわしをひっぱたきおったぞ。自分の娘に、あんな露出度の高い衣装を着せて、このど助平というてな!!」

れんがの道を転がる落ち葉は、光に押されて移動していると思われた。

いま、その道で、ひと組の男女がすれちがおうとしていた。

高校生の少年と少女と。

少女はイヤホーンを耳につけていた。

すれちがい、すこしして、少女は振り向いた。

少年への憎しみも捨て、傷つくことへの怯えもなくした、ちよっぴり勇氣にあふれた視線。

少年も立ちどまる。

少女は少年に向かって歩きだした。

二つの世界ははるかに遠かったけれど、二人の間は、たった数秒の光の道だった。

幻夢戦記レダ 完

## 《対談》

## 「幻夢戦記レダ」をめぐって

菊地 秀行

VS

いのまたむつみ

——オリジナルアニメ「レダ」の魅力

菊地 どうも、はじめまして。

いのまた はじめまして。

菊地 今回、ノヴェライズという形で「幻夢戦記レダ」の小説を書かせていただいたわけですが、これはもともとビデオ用のオリジナルアニメ作品として作られたものですね。いのまた そうです。東宝とカナメプロの製作で……。

菊地 はじめから、こういう女の子の冒険物語みたいな発想だったんですか？

いのまた ええ。それと、私がキャラクターを作るということだけ決まっていて、具体的

なストーリーは湯山監督や脚本の武上さん、長尾プロデューサー、アニメーション・コーディネーターの影山さんといった方たちが話し合いながら作っていくという形だったんです。内容としては忍者ものとか戦争もの、ハードSFというように、はじめはいろいろなアイディアが出ていたんですが、最終的に湯山監督の考えで、いまのような少女の内面世界というか、一種の夢物語的なものになったわけです。

菊地 完成したビデオを拝見しましたが、まず絵柄や色使いが洗練されていて、とても美しいアニメになっていますね。内容的にもサービスマン満点で、これならお金を出して買おうという気になる（笑）。実際、売れゆきもいいし、評判も上々だそうですね。

いのまた ありがとうございます。評判がいいと聞いて、じつはホッとしているところなんです。菊地さんはどんなところがよかったと思われるですか？

菊地 そうですね、個人的にはやはりアシャンティの世界とそこに住むへんてこな生物たちが細かく描かれているところが気に入りました。やっぱり、あの異世界の雰囲気みたいなものというのは、作品のイメージの要ですものね。

いのまた ええ。美術的なコンセプトは、メカデザインも含めて豊増さんが作られているんですが、「レダの鎧」やヨニのロボットなどは、へんにメカっぽくないものと心がけていますよね。浮遊城ガルバも、金属的な感触じゃなくて、むしろ石造りの古代遺跡みたい

な感じで、壁があちこち崩れているようなものというイメージで考えられています。

菊地 陽子が「レダの戦士」になったときの、ビキニ風のスタイルは、最初からああいうなまめかしいものを考えられていたんですか？ というのは、アシャンティに行ってから、陽子は普通の女子高生であるほうがよかったですか、と思ったものですから……。

いのまた ああ、それはやはり、女の子が剣を持って戦うときに、姿かたちがかわいらしく見えるようなスタイルがいいんじゃないかということ……あまり戦闘服という感じにはしたくなかったですよね。

菊地 なるほど。そういえば、外国のSFアートにはああいう露出度の多い女戦士というのはよく出てきますけど、アニメでは珍しいんじゃないですか？

いのまた それは湯山監督もおっしゃってました。マンガとかイラストではよく見るけれど、アニメのヒロインとしては意外にこれまで出てこなかったねって……。

菊地 でも、感心するのは、女性のいのまたさんが作画監督をなさっているせいか、ああいうスタイルだからということ、へんにお色気を強調していないでしょ？ それがぎやうくになまめかしくて、陽子のキャラクターを生き生きと見せているんじゃないかと思うんですけど。

いのまた そうですね、あまりいやらしく見えては困ると思いましたが、多少気をつけ

た部分はあります。

菊地 あとは、やはりアニメーション、映像の強みといいますか、エアバイクのステードが走っていくシーンのスピード感というのはさすがですね。文章ではあれがなかなか表現できないんですよ。ガルバの中の戦いとか、崩壊シーンもよくできていて、全体的にアニメーターの皆さんがおぎなりにやってないな、ずいぶん力を入れて描いているなっていう印象が、見ていて強く感じられる作品ですね。

いのまたさんとしては、はじめての完全オリジナル作品の、しかも作画監督という大きな責任を果たされたわけですから、いろいろとご苦労があったと思うんですが、そのへんはいかがですか？

いのまた 苦労というか、できあがってしまうと反省することのほうが多いですね。これはスタッフの一致した意見なんですけど、あと十分、時間の余裕があれば、もうすこし描きこめたなあという部分が多いんです。主人公の陽子の生活とか、アシャンティの住人やレタの伝説といった物語の背景なども、もっと詳しく描いておいたほうがよかったんじゃないかって……。

菊地 登場人物が少ないという点は、むしろ物語が煩雑はんざつになるのを防ぐために、うまく整理してあるなというふうにも感じましたよ。



いのまた まず、ビデオで見るということを考えた場合、劇場映画とは違いますから、一時間前後の長さにまとめるのが適当だろうという判断があつて、それである程度、省略しているんです。

じつは、準備稿段階のデザインでは、陽子もヨニももっと女性的でおとなっぽい線で描いていたんです。たとえば陽子でしたら、突然見知らぬ世界にほうりだされたことへの当惑、ヨニでしたら滅びゆく世界の住人がもっている一種のほかなさみたいなのを、それぞれ絵として見せたいという気持ちがあつたんですが、アニメのセル画にした場合、そういうニュアンスは出しにくいし、第一に線が多すぎて動かしづらい。それで決定稿のような丸っこい、いかにもアニメ、アニメした線のキャラに直しているわけなんです。そういった絵の上での省略ということも、アニメの作業の中では必要になってきますね。

——おたがい好きな道に進んで

菊地 ところで、いのまたさんはいつごろからアニメのお仕事をはじめられたんですか？  
じつは「レダ」を見ていて、こういうグレードの高い作品を作りたいのまたさんという女性はいした才能をもっているんだなという気があらためてしたものですから。

いのまた それは私だけの力じゃありませんよ。もともと絵が好きで、高校時代にアニメの仕上げのアルバイトをしていますが、その社長さんが、「紹介してあげるから、どうせならプロになっちゃいなさい。」とおっしゃってくださったって、それで葦プロという会社にはいったんです。

菊地 どんな作品をやってらっしゃったんですか？

いのまた 葦プロでは、「くじらのホセフィーナ」「宇宙戦士バルディオス」「戦国魔神ゴーショーグン」などの動画と原画、カナメプロに移って、「魔境伝説アクロバンチ」「さすがの猿飛」「プラレス3四郎」のキャラ・デザイン、原画、作監などをやりました。いまはフリーになってますが……。

菊地 僕と同じで、好きな道をずっと進んでいるんですね。僕も昔から小説を書くのが好きで、大学時代は推理小説研究会の機関誌にSFやファンタジーっぽい小説を書いてました。

いのまた ブラッドベリがお好きと聞いてますけど。

菊地 そうですね、ブラッドベリとかハインラインとか。50年代のアメリカSFと、それとホラー（恐怖）の分野ではH・P・ラブクラフトの作品が好きなんですよ。自分で書く作品はSFとホラーとアクションが一体になったメチャクチャな作品で（笑）、とにかくお

もしろければいいという感じでやってます。

いのまた 今度の小説版の「レダ」は、アニメとは変えた部分もあるんですか？

菊地 ストーリー展開は同じですけど、設定的な部分は変えました。

いのまた といいますと？

菊地 これは批判になってしまおうと困るんですが、アニメではアシャンティの描写が、僕らの住んでいる世界の延長みたいな形でとらえられていますよね。たとえば荒野が、アメリカの西部みたいな雰囲気が出てくる。ですから、文章のほうではもっと異様な、現実世界とか離れたものになるように心がけました。犬のリングラムが人間の言葉をしゃべるということにしても、多少すじが通るように工夫したつもりなんですよ。あと、陽子の性格ももうすこし現代っ子っぽくしてありますし、ヨニの巨大ロボットももったいないので、活躍する場面をすこし増やしたりしてます。まあ、そのへんは読んでのお楽しみというところで（笑）。

ところで、いのまたさんの「レダ」のつぎのお仕事というのは決まっていますんですか？いのまた アニメのほうはちょっとお休みで、いま、藤川桂介さんの小説「宇宙皇子」のイラストをずっと描いています。先日もその取材で沖縄へ行ってきました。

菊地 僕のほうは「レダ」が終わってひと息ついたところで、書き下ろしの長編が何本か

あるので、それにとりかかります。今年前半にあと二、三冊書かなきゃいけないですよ。  
なかなか遊ぶ時間がない（笑）。

いのまた 私も早く科学万博へ行ってみたい（笑）。

菊地 とにかく、おたがいにがんばっていい仕事をしましょう。

いのまた そうですね、小説のほうも楽しみにしています。がんばってください。

## 作品紹介

東宝+カナメプロ製作によるオリジナル・アニメビデオ作品「幻夢戦記  
レダ」('85年発売)を、人気作家菊地秀行の手によって小説化したもの。

## 著者略歴

きくち ひでゆき

**菊地秀行** 昭和24年生まれ。日本推理作家協会会員。SF・ホラー映画の愛好家で、フィルムコレクターでもある。「エイリアンシリーズ」(朝日ソノラマ刊)をはじめとする作品群は、ヤングに圧倒的な支持を得ている。このほか、翻訳書も多い。



## ファンタスティック・アドベンチャー・アニメ 幻夢戦記 レダ

きくち ひでゆき

**菊地秀行 文 いのまたむつみ 絵**

昭和60年5月15日 第1刷発行

定価400円

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

© 1985 菊地秀行

Printed in Japan

デザイン—スタジオ100%

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社 大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。  
送料小社負担にてお取り替えします。

ISBN4-06-190029-3 (0) (映)

講談社

X文庫



読むと見える！

映画小説

学  
コメディー 園  
生徒諸君！

原作／庄司陽子  
文／花井愛子

明るくさわやかな女の子、ナツキのまわりに集まってきた悪タレ五人組の青春ドラマ。

映画小説

映画  
ファンタジー  
スプラッシュ

タッチストーンズ・  
フィルム作品  
文／佐山 透

大都会ニューヨークで繰り広げられる、人間と人魚の感動のラブロマンス！

映画小説

スピルバーグ  
総指揮作品  
グレムリン

ワーナー・ブラ  
ザーズ映画作品  
文／辻 真先

銀行に勤めるビリーは、クリスマスプレゼントに、世にも珍しい生き物をもらった……。

映画小説

ハチャメチャ  
オバケ騒動記  
ゴーストバスターズ

コロムビア映画  
作品  
文／井口民樹

ユニークな三人組が、オバケ退治会社を作って、ニューヨークの街のオバケ掃除を！

映画小説

J・チエン  
主演作品  
スパルタンX

ゴールデン・ハー  
ベスト・プロ作品  
文／吉岡 平

謎のスペイン美女をめぐって、悪魔の陰謀を打ち砕く現代の騎士道物語。

キミをヒョーキにしたい！



# 幻夢戦記レダ

LPレコードも大好評発売中!



(音楽編)

定価2500円(音楽編, ドラマ編とも。)

発売 キングレコード



講談社 X 文庫

講談社X文庫 定価400円

ISBN4-06-190029-3 C0193 ¥400E (0)

